真剣で騎士（笑）に恋しなさい！

ガスキン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

思ったよりも熱が入ったので独立した作品にしました。なお、数話程度で終わる模様。

この作品は拙作ハイスクールＤ×Ｄ～転生したら騎士（笑）になってました～のオリ主をまじこい世界にぶっ込んだ妄想垂れ流し小説です。主人公最強だったりハーレムだったり色々好みが分かれる作品となっていますので、タグ等を見て忌避感を抱かれましたらブラウザバックお願いします。

オリ主の人となりや強さについてはぜひ上記の作品を読んでいただければと存じま

す。

目次

真剣で騎士（笑）に恋しなさい！ 1
真剣で騎士（笑）に恋しなさい！ その二 10
真剣で騎士（笑）に恋しなさい！ その三 19
真剣で騎士（笑）に恋しなさい！ その四 31
真剣で騎士（笑）に恋しなさい！ その五 46
真剣で騎士（笑）に恋しなさい！ その六 64
真剣で騎士（笑）に恋しなさい！ その七 81

真剣で騎士（笑）に恋しなさい！

『なあ、アンタに頼みがあるんやけど』
オカンからの念話に俺は思わず顔をしかめた。
――今度はなんですか？
『な、なんや。そんな警戒したような声出して』
そりゃ前科（スパロボ短編）がありますからね。まあ、最終的に天寿全う前に返してもらえたからいいですけど。
『えー、でもアンタやって時間が出来たらちょくちょくあっちに行くようウチに頼んでくるやん』
……まあ、あれだけ一緒に過ごしたんですから会いたくなりますよ。……とりあえず、話を進めましょう。頼みってなんですか？
『ああ、それなんやけど。実はな、ウチ、アンタみたいに気に入った子に色々お節介焼かせてもろうとるんやけど、その中の一人がな、アンタに会ってみたいって言うんよ』
俺みたいって……死んでから別世界に行った人って事ですか？　え、何でそんな人が俺の事知ってるんですか？

『そらウチが教えたからな』

あ、そっスか……。

『そこの世界のゴタゴタも落ち着いたみたいやし。ウチの顔を立てると思って行ってもらえんやろか』

確かに、ここ最近事件も起こってないし。……まあ、それくらいなら。

『そうか！　いやあ助かるわ。ほな、早速送らせてもらうな！』

だと思いましたよ。……あ、肝心な事を聞いてなかった。その会いたいっていう方の名前は？

『名前は織江ちゃんや。ごっつう優しい子やからきっとアンタも可愛がってもらえるはずやで～』

そんな声を聞きながらフッと意識が遠のいたと思ったら、次の瞬間俺は一軒の建物の前に立っていた。

「佐山雑貨店……」

恐らくこの中に織江さんがいるんだろう。にしても、俺なんかに興味って変わった人だなぁ……

若干緊張しつつ俺は店の扉を開いた。備え付けてあったベルが店内に鳴り響く。

「は～い。いらっしゃいませぇ」

奥の方から一人の女性がゆっくりと姿を現した。年は六十代くらいだろうか。なんとも柔和な笑みを浮かべるその顔は見てるとこちらも笑みを浮かべてしまいそうだった。

「すみません。織江さんでしょうか？　俺は神崎　亮真と申します」

「神崎？　……あらまあ！　ひょっとしてあなたがオ・クァーン様お気に入りの？」

「はは、お気に入りかどうかはわかりませんけど」

「ふふ、あの方の言う通りとっても男前ねぇ。……あらいやだ。私ったら自己紹介もせずに」

そういうと、織江さんは美しいお辞儀をしながら俺に自己紹介をしてくれた。

「改めまして。佐山　織江です。この度はこんなおばあちゃんのわがままを聞いてくれて本当にありがとうございます。さ、どうぞこちらへ」

織江さんに促され、店内に設置された席に座る。その間に彼女は店の入り口のシャッターを閉めてこちらへと戻ってきた。

「少し早いけれど、今日は店じまいね。亮真さん……でいいかしら？　あなた紅茶はお好き？」

「え？　あ、ええ。あまり飲みませんけど、好きな方ではあります」

「そう。なら用意するからちょっと待っててね」

そう言って奥に引っ込む織江さん。……とりあえず、店の中を見渡してみる。雑貨店というだけあって、アクセサリーや日用品、文房具まで置いてある。
「素敵なお店ですね」
「うふふ、ありがとう。ここは学校に近いから学生さんもよく来てくれるのよ」
それからしばらくして、織江さんが紅茶とお茶菓子を持って俺の前の席に着いた。
「はい、どうぞ」
「ありがとうございます」
早速紅茶を頂くことにした。……銘柄とか詳しくないが、美味い。
「お口に合うかしら？」
「はい。美味しいです」
「それはよかったわ」
「それで、いきなり本題に入って申し訳ありませんが、何故、俺に会いたいと？」
俺の問いに、織江さんは口元に手を当てて上品に笑った。
「ごめんなさい。本当に大した理由なんてないのよ。最近、オ・クァーン様がよくあなたの事を話すから。どんな子なのか気になっちゃって」
「あの人とはよく話をされるんですか？」
「ええ。この年になると誰かとお話するくらいしか楽しみがないのよ。……私ね、前世

にあまりいい思い出がなくて。体も丈夫じゃなかったから、オ・クァーン様がそれなら思いっきり運動できるようにってこの世界に転生させてくれたの。ええっと、なんだったかしら？　ま、まじ……なんとかっていうゲームの世界らしいわ」
「ゲーム？」
「ええ。でも私そういうのに疎くて。結局どういう世界か知らないままこの年まで生きてきたの。でも、私、幸せよ。お友達もたくさん作れたし。若いころには武術なんかにも挑戦したりしてみたりね」
「武術……ですか？」
「こう見えても結構強かったのよ？　今も現役の鉄心ちゃんやヒュームちゃん……あ、今のはお友達の名前ね。他にも何人からか再開してみないなんて言われてるの。まあ、私はもう満足してるからいいんだけどね」
　へえ、そこまで言われるって事は本当に凄腕だったんだろうな。
「っと、いけない。こんなおばあちゃんの話じゃなくて、今度はあなたのお話を聞かせてくれないかしら？」
　といわれても。面白い話なんか……いや、ダメだ。こんなキラキラした目で見られたらありませんなんて言えん……！
「ええっと、それなら……」

何とか話題をひねり出しながら会話を続ける。そうしている間に窓から見える景色はすっかり暗くなってしまっていた。
「あらあら。もうこんな時間なのね。そろそろ夕飯の支度をしないと」
「そうですね。では、俺はこれで失礼を……」
「え？　何を言うの？　今日からしばらくここで暮らすんでしょう。お部屋も準備してるのよ」
「……はい？」
オカン！　オカン!!　オカン!!!　どういうことか説明してくりゃれろ！
『……』
俺の訴えに対するオカンの回答は……満面の笑みにサムズアップだった。最初からこうするつもりだったなあの人ぉ！
「亮真さん、お肉とお魚どちらが好きかしら？」
「……肉です。あと、手伝います」
「まあ、助かるわ。ならお米の準備お願いできるかしら」
……まあ、いいか。こんな嬉しそうにされたらぼやいてる自分が情けなくなるし。
そんなこんなで、俺はしばらくの間織江さんの元でお世話になる事になったのだった。

・・・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・

翌日、朝食を済ませた俺は店内の清掃をする事にした。お世話になる以上これくらいはしないと気が済まない。

そうこうしている間に開店時間が近づいて来た。とそこへ織江さんが唐突にお札を数枚差し出してきた。

「織江さん、これは？」

「せっかくだし、亮真さんにもこの町の事を知ってもらおうと思って。これで遊んでらっしゃいな」

どうやら外出用のお小遣いのようだ……じゃなくて！

「そんな、ここまでしてもらうわけには……！」

「いいのよ。お小遣いをあげるおばあちゃんって一度やってみたかったのよねぇ」

よねぇって……。うわ、凄いニコニコしてる……。

（……よし、とりあえず受け取るだけ受け取って、一切使わずに帰ってきたら返そう）

（……って思ってるんでしょうねぇ）

「い、行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい」

こうして、軍資金（使用不可）を手に、俺は町の散策へと出発したのだった。

・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・

「ふう……」

たまたま見つけた公園のベンチに腰掛け、ぼんやりと空を見上げる。店を出てから大体二時間くらいはたっただろうか。

「……疲れた」

目的もなくただひたすらにうろつきまわっただけだしな。まあ、いい運動になったと思えばいいか。

とはいえ、ただブラブラするくらいなら店に戻って織江さんの手伝いでもした方がずっと有意義だし、そろそろ戻って……

「おい、お前！」

突然の声に空から視線を下すと、胴着姿の小学生くらいの女の子が腕を組みながらこちらを睨みつけていた。ええ……何事ぉ？

「……おや？」

あれ、なんかこの子見覚えが……ああ！　そうだ、散策中に走っているこの子の姿を何度か見かけたような。ひょっとしてランニングコースだったのかな？

「お前、変質者だろ」

「ん？」

「さっきから私の後をずっと追いかけて来てただろ」

「んん？」

「まあ、私の様な美少女に目を奪われるのはわかるけどな」

「んんん？」

「けど、変質者に追いかけられてもキモイだけだし。とりあえず百代ちゃんに成敗されろ」

組んでいた腕を下し、拳を握る女の子。これは……うん、盛大に誤解されてるな。

「ちょっと待ってくれないかな。確かにキミの事は何度か見かけたけど、決して追いかけまわしていたわけでは……」

「問答無用！」

叫ぶや否や、女の子は驚くべき速度で拳を放ってきたのだった。

真剣で騎士（笑）に恋しなさい！　その二

どうも、突如として変質者扱いされてしまった神崎　亮真です。

「とりゃあぁぁぁぁ！」

変質者は成敗してやると意気込む少女の拳が迫る。この体なら別にこのまま受け止めてもいいんだけど、それでこの子の手を負傷させるのもあれだし……。

（とりあえず……避けよう）

「ッ!?」

殴られる寸前、右半身だけ動かしてそれを避ける。そのまま回り込むようにして少女の背後に移動してもう一度声をかける。

「キミ、落ち着いて――――」

「せりゃっ！」

止まるどころか俺の声をさえぎる様に振り向きざまにハイキックをかまして来たよこの子!?

「俺は別に――――」

「うりゃあ！」

「キミの事を――――」
「せいっ！」
「追いかけていたわけじゃ――――」
「やかましい！　黙って私にぶちのめされろ！」
　嫌です（迫真）。……うん、仕方ない。このまま避け続けてこの子が落ち着いてくれるまで待つか。
「お前、何で反撃してこない！　それでも男か！」
「反撃する理由がないからな。とにかくキミが落ち着いてくれるまでは何もしないさ」
「なら避けずに私に殴られろ！」
「生憎とサンドバッグになる趣味は無いからね」
　時たま言葉を交わしながらひたすら少女から逃げ続ける。……どれくらいそうしていただろうか。少女の動きが少しずつゆっくりになってきた。
「はあっ……はあっ……。クソ、走り込みさえしてなけりゃ……」
　いや、トレーニングの方が大事だと思うよ？　というか、そうだ。この子こんな所で時間つぶしてていいんだろうか。
「なあ、キミ」
「なんだ変質者！」

おうふ……。今更ながらこんな小さな子に変質者呼ばわりは地味に傷つくな……。と、俺の事は今はいいか。

「キミの言い分だと、鍛錬中に俺を見つけたからここに来たみたいだが、時間とかは大丈夫なのかい？」

公園の端に設置された時計を指さす。それを確認した少女の顔色が瞬く間に変化した。

「げっ！　もうこんな時間!?　早く戻らないとジジイのゲンコツが……。クソ、なんでこんな日に限って制限時間なんか設けるんだあのジジイ！」

忌々しそうに舌打ちして少女は公園の出入り口へ駆ける。そのまま去っていくかと思いきや、こちらへ振り向き俺に向かって指を突き出して来た。

「おい変質者！　明日またこの公園に来い。次こそ私がぶちのめしてやるからな！」

逃げるなよ！　と言い残し、少女は去って行った。いや、俺はまだ答えてないし。そもそも変質者扱いしている人間にもう一度会おうと思ったらだめだと思うんだが……。

・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・

「その子は川神　百代さんね」

店へ戻り、預かっていたお金をきっちりお返した後、公園であった出来事を織江さんに話すと、彼女はそう断言した。
「そういえば、あの子は自分の事を百代ちゃんと言っていました。織江さんのお知り合いなんですか？」
「ええ。亮真さん、川神院という寺院には訪れてみたかしら？」
「いえ、生憎」
「ただのお寺じゃないの。武の総本山って呼ばれるほどの由緒正しい場所でね、たくさんの人が体と心を鍛えるために日々鍛錬を行っているの。百代さんはね、その川神院の総代さんのお孫さんなの」
「その方、もしかして織江さんのお友達という？」
「ええ。川神鉄心ちゃんっていうひょうきんな方よ。ちょっと助平なところがたまに傷だけれど、武に関してはとっても真摯なのよ」
そこまで話すと、織江さんはふと表情を陰らせた。
「……百代さんはね、武術の才能が素晴らしいの。天才って彼女の様な子の事を言うんでしょうね」
「何か心配事が？」
「既に川神院でもあの子とまともに手合わせ出来る人は数えるくらいしかいないらしい

の。……だからなのかしら。百代さん、鍛錬も必要最低限しかこなしていないんですって。その程度の鍛え方でも勝ってしまうから……」

なるほど。それで天才か。

「武術というのはもちろん「力」が大切だけれど、それと同じくらい「心」も大切。だから川神院でも心を鍛える修業はしているみたいなんだけれど、百代さんはそれにも消極的みたいで。……このままだといつか取返しのつかない事になるんじゃないかって私も心配しているの。あの子はね、私の事も「おばば様」って慕ってくれているの。だから、私も百代さんの為に何かしてあげたいの」

自分が百代ちゃんの鍛錬に付き合ってあげられればいいけれど、すでに引退して長い自分がでしゃばるのはあの子は嫌がるだろうからと織江さんは言う。

「……ねえ、亮真さん。こうして私のわがままを叶えてくださったあなたに図々しいのは百も承知なのだけれど、しばらく百代さんに付き合ってあげてくださらない？」

「俺がですか？」

「オ・クァーン様から聞いています。あなた、とってもお強いんでしょう？　それに、大切なものの為に努力する大切さもご存じだと。そんなあなたなら、百代さんもきっと……」

「織江さん……」

「本格的な教えを施してもらいたいわけじゃないの。それは川神院の……鉄心ちゃんやルーちゃんの役目だから。……どうか、百代ちゃんの「心」を育む為に力を貸してくださいな」

深々と頭を下げる織江さん。……ああ、本当にこの人にとってあの子は大切なんだなというのがこれだけで十分理解できた。

――ここまでされて断れるか？　いいや無理だね。

「わかりました。俺でお役に立てるかわかりませんが、明日もあの子に会いに行ってみます」

「……ありがとう、亮真さん」

こうして俺は再び百代ちゃんに会いに行く事となった。あ、ちなみに変質者云々の誤解は織江さんの名前を出せばきっと大丈夫との事だ。

・・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

そして翌日、昨日と同じ時間に例の公園でベンチに座っていると、本当に百代ちゃんがやって来た。また殴りかかって来そうだったが……。

「逃げずによく来たな変質者！」

「織江さんに頼まれたからな」
「ッ!?　お前、おばば様の知り合いか!?」
織江さんの所でお世話になっている事を伝えると、百代ちゃんはあっさりと構えを解いた後、頭を下げてきた。
「おばば様の知り合いが変質者なわけない。……勘違いしてすみませんでした」
織江さんすげえ！　名前だけでこの態度の変化って。よっぽどこの子に信頼されてるんだな。
それにこの子も。昨日の様子や織江さんの話を聞いた時はもっとオラついてるかと思ったら、こうやって素直に謝れるし、いい子じゃないか。
「ッ!?　な、何をする!?」
あ、しまった！　無意識に百代ちゃんの頭を撫でてしまっていた。
（コイツ、動きが読めなかった!?　それに、何だ今の。撫でられたところがほわほわする）
「百代ちゃん？」
「な、何でもない！　それで、あなたの名前は？　私の名前を知られているのにこっちが知らないのは気に食わない」
「ああ、すまない。俺の名前は神崎　亮真だよ」

「神崎さんですね。おばば様に頼まれたって言いましたけど、何なんですか？」
「ああ、実は……」
　しばらくはキミの相手をするように言われたと伝えると、百代ちゃんは途端に目を輝かせた。
「それはつまり私の鍛錬に付き合ってくれるという事ですね！」
「それがキミの希望なら構わないけど」
「ふふふ。さすがおばば様！　私の事をよくわかってくれてる！　小言ばかり言うジジイとは大違いだ」
　あ、なんか嫌な予感がしてきた。
「では神崎さん、早速始めましょう！　昨日みたいに好きに動き回ってください。私はその動きを読んで、あなたの体に一発叩き込んでやりますから！」
　この後滅茶苦茶逃げ回った（一時間）。そして帰宅後、織江さんに滅茶苦茶褒められた。

・・・・・・・・
・・・・・・・
・・・

　百代ちゃんとの鍛錬（という名の鬼ごっこ）三日目。この日も公園で百代ちゃんと待

ち合わせ。
「遅いですよ神崎さん」
すでに到着していた百代ちゃんが屈伸しながらぼやく。いや、一応待ち合わせ時間五分前何ですけど。
「す、すまない」
「ま、遅れた分はこの後返してくれればいいですよ」
「準備運動はもういいのかい？」
「ええ。なので早速始めましょう……と言いたいところなんですが」
「？」
「……いい加減ウザったいしな。おい、そこに隠れているヤツ、出てこい！」
百代ちゃんが木々の植えてある方を睨みつける。するとガサガサと草むらが揺れたと思ったら、そこから一人の女の子が姿を現した。
「お前、私が神崎さんと出会った日も、私達の鍛錬してた日も陰でジッと見てたよな。何が目的だ？」
百代ちゃんの質問に女の子は俯いたままだったが、やがて意を決したように俺達に近づいて来ると、右手に乗せた物を差し出してきた。
「……マ、マシュマロ……食べる？」

真剣で騎士（笑）に恋しなさい！　その三

マシュマロをこちらに差し出し、緊張した面持ちの女の子。そんな彼女に対し百代ちゃんはというと。

「……お前は何を言っているんだ？」

百代ちゃんや、いくら武術を学んでいるとは言っても今〝あの人〟を肖らなくても……！

「ッ……！」

ジト目の百代ちゃんにビクつく女の子。ダメだよ百代ちゃん。怯えさせちゃってるじゃないですか。

「キミのオヤツを分けてくれるのかな？」

怖がらせない様に努めて優しく声をかけてみると、女の子は小さく頷いた。

「いらん。もらう理由がない。というか鍛錬の邪魔だからさっさとどっか行け」

「落ち着くんだ百代ちゃん。わざわざずっと眺めてたという事は俺達に何か用事があるんだと思うよ？」

「私にはありませんけどね」

イライラする百代ちゃんを宥め、俺は女の子に隠れていた理由を聞いてみた。
「え、えっとね。お兄さん達が追いかけっこしているの見ててね。楽しそうだったからボクも混ぜて欲しいなって……」
「そのマシュマロは？」
「……これあげれば混ぜてくれると思ったから」
なるほど、つまりこの子は遊び相手が欲しいんだな。……にしても、〝物をあげれば仲間に入れてもらえるかもしれない〟だなんて……こんな小さな子に誰がこんな悲しい考え方を教えやがったんだ……！
「馬鹿馬鹿しい。大体なんで私達なんだ。遊んでくれそうな奴らなんか他にいくらでもいるだろ」
「……ボク、お願いしたよ。でも「ていいんおーばー」だからダメって……」
そっか、断られちゃったんだな。……わかるよその気持ち。俺も似たような事された事あるし。
「そもそも私達は遊びじゃなく鍛錬をしてるんだ」
「たんれん？」
「……チッ。もういいでしょう神崎さん。こんなヤツ放っておいて始めましょう……！」

吐き捨てる百代ちゃんに女の子の目に見る見るうちに涙が浮かんでいく。……そうか、織江さんの危惧しているのはこういう事か。

（百代ちゃんにとって武術というのは何よりも優先するものなんだろう。けど、大切にしている分、それを妨げようとするものに対しては攻撃的になってしまう。だが、それでは織江さんのいう「心」を育む事は出来ない。なら、俺が彼女に……いや、彼女達にしてあげられる事は……）

「神崎さん？」

「……百代ちゃん、俺と勝負しないか？」

俺の提案に、百代ちゃんは期待と戸惑いの半々といった目を向けてきた。

「……へえ、どういう勝負ですか？」

「やる事は変わらない。キミが攻撃して俺が避ける。そうだな……三十分。その間に一撃入れられればキミの勝ち。避けきれば俺の勝ち。もし俺が勝ったら、俺と一緒にこの子と遊んでもらうよ」

そう告げると二人の表情が一変する。百代ちゃんは明らかに不満そうな。そして女の子は驚きに目を丸くしていた。……べ、別に俺一人でこの子と遊んでたらまた変質者に間違われるのが嫌だとかそういうわけじゃな無いですからね！

「なら、私が勝ったら？」

「……俺の本気を見せるよ」
「ッ……!?」
　この三日間、百代ちゃんはずっと俺に本気を見せろと訴えてきた。もちろん、手を抜いているつもりはなかったが、それでも彼女には不十分だったようだ。
「……嘘じゃないですよね」
「約束する」
「技とか見せてもらったりも？」
「ああ」
「後からやっぱり無しとか言うつもりは」
「無いよ」
「……よっしゃーっ！　いい！　やる！　その勝負受ける！　絶対勝ってやる！　……おい、お前！」
「ふえっ!?　な、何？」
「名前は？」
「え？　あ、こ、小雪だよ？」
「よし小雪！　お前も今の約束聞いてただろ？」
「う、うん」

「ふふふ、証人もバッチリ。これで逃げられませんからね神崎さん！」
俺、よっぽど信用ないんですかねぇ（泣）。
「そういうわけだから、小雪ちゃん。ちょっとだけ待っててもらっていいかな？」
「わかった。あ、あの……頑張ってね？」
両手をグッと握って応援してくれる小雪ちゃん。……これは、負けるわけにはいきませんねえ!!
・・・・・・・・・
・・・・・・
・・・
そして三十分後、そこには地面にへたり込む百代ちゃんとそれを見下ろす俺がいた。
今日の百代ちゃんは明らかに昨日までと比べて動きが鋭くなっていた。これは百代ちゃんが本気を出していなかったというわけじゃなく、俺との約束を絶対に叶えさせるという思いが動きに現れたんだと思う。
……まあ、それは彼女だけではなく俺の方もなんだが。
「はあっ……はあっ……。おい神崎さん！　やっぱり今までずっと遊んでたな！　何だよあの変態的な動きは!?」
へ、変態……。いや、確かに絶対勝たないとと思って頑張ったけど、そこまで言われ

るような事はしてないよ！　↑空中二段ジャンプ。速く動きすぎて分身したかのようになる。まるでワープしたかのような移動。

――どう見ても変態です。本当にありがとうございました。

「ッ!?」

な、何だ今の？　どこからか変な声が……。

「お兄さん、すごーい！」

小雪ちゃんがキラキラした目で俺を見ている。結果的に一人除け者にしてしまったみたいで申し訳なかったが、どうやら楽しんでもらえたみたいだ。

（……やっぱり、この人は凄い。川神院じゃ私の動きに追い付けるヤツはほとんどいない。ジジイはいつも小言ばかりでまともに相手してくれないし、最近ルー師範は一子に付きっ切り。釈迦堂さんだって私が弟子のはずなのに一子を可愛がってる。それなのにやれ鍛錬をサボるなとか、心を鍛えろとか言いたい事だけ言ってきてばかり。けどこの人は……神崎さんは違う。余計な事は言わずに私に付き合ってくれるし、手加減されてるけど、侮られてるわけじゃない。それに……）

「いや、凄いのは百代ちゃんだよ」

「え？」

俺は百代ちゃんの傍にしゃがみこんだ。

「キミだって、昨日より動きが全然違っていたから驚いたよ。このまま毎日一生懸命鍛え続けたら、俺ぐらいの年齢になったらとんでもない武術家になってしまうかもな」

だからこそ、織江さんの言う通り、才能だけじゃなく、努力を重ねる大切さとその力を正しく使えるよう「心」を鍛えないといけないんだろうな。

「あ……」

そんな事を考えている内に、俺はまた百代ちゃんの頭を無意識に撫でてしまっていた。

（それに……この人はちゃんと褒めてくれる。今日までだって、ちょっとした動きとか拳の打ち方とか、細かいところを見つけては凄いって言ってくれる。〝出来て当然〟とか〝まだまだ未熟〟とか言わずに、〝今の〟私を見てくれている。それが……私は嬉しいんだ）

「百代ちゃん？」

「……もし」

「ん？」

「もし、私が鍛錬をサボらずに鍛えて、ジジイも余裕で倒せるくらい強くなれたら……褒めてくれますか？」

おじいさんって、確か川神院の総代さんなんだよな。おお、つまり百代ちゃんは新た

な総代さんを目指すつもりなんだな！　素晴らしい目標じゃないか！
「ああ、もちろん」
それは百代ちゃんが夢を叶えたって事だもんね。そりゃもう百パーセント、全力で褒め称えさせて頂きますとも！
「ッ～～～～～～！　あー、もう、神崎さんがそこまで言うんならしょうがないなぁ！本当は嫌だけど、神崎さんがどうしても褒めたいって言うんなら、百代ちゃん頑張るしかないかな～！」
ひたすらしょうがないと繰り返す百代ちゃん。なのにその顔はとても嬉しそうだった。
うーん、女の子の気持ちはわかりませんなぁ（なげやり）。
「ま、頑張るのは明日からとして……待たせたな小雪。約束通り遊んでやろう」
起き上がった百代ちゃんは小雪ちゃんの前まで歩いていくと右手を差し出した。
「……本当にいいの？」
「私は嘘が嫌いだ。約束は守る。……だが覚悟しろよ。私と遊ぶんなら、私が満足するまで家に帰さないからな？」
「――――うん！」
返事と共に百代ちゃんの手を握る小雪ちゃん。そして二人は元気よく遊具の方へ駆

け出して行った。
「ほら、神崎さんも早く来い！」
「はは、今行くよ」
よ～し、お兄さん張り切っちゃうぞ～！
・・・・・・・・・
・・・・・・
・・・
はしゃぐ二人に付き合っている内に辺りはすっかり夕暮れとなっていた。二人ともすっかり仲良しになり「小雪」「百代ちゃん」とお互いに呼び合う程になっていた。
「二人とも、そろそろ帰ろう。親御さんが心配してしまうよ」
「ジジイは心配というより門限について言ってきそうですけどね」
やれやれと首を振る百代ちゃん。
「……あの人は心配なんかしないよ」
「小雪ちゃん？」
「ッ……。な、何でもないよお兄さん」
ごまかすように言う小雪ちゃんだが、俺に耳にはしっかり聞こえていた。あの人？両親に対する呼び方にしては他人行儀過ぎるが……。

「ね、ねえ、もうちょっと遊ぼうよ百代ちゃん」
「あー、私もそうしたいけど、さすがにそろそろ帰らないとな」
「で、でも……」
「別に今からじゃなくて明日またたっぷり遊べばいいだろ」
百代ちゃんのその一言に、小雪ちゃんは衝撃を受けたかのように固まってしまった。
「？　私、何か変な事言ったか？」
「……また、またボクと遊んでくれるの？」
「うむ。百代ちゃんはお前が気に入った。特別に友達にしてやろう」
そろそろ本気でヤバいな……と言い残し、百代ちゃんが公園を出ていく。かと思ったら小雪ちゃんの方を振り返り。
「またな、小雪！」
最後に、とても素敵な笑顔で挨拶したのだった。
「――――うん！　また、またね、百代ちゃん！」
そして、小雪ちゃんもまた、眩いばかりの笑顔でそれに応えたのだった。
・・・・・・・・・
・・・・・・
・・・・

「……と、いう感じで今日は終わりましたね」
織江さんに今日の出来事を報告する。すでに日課となっているこの報告だが、織江さんの様子がいつもと違う。
「亮真さん！」
「は、はい！」
織江さんは肩を震わせたかと思うといきなり俺の名前を叫んだ。反射的に返事をする俺の前で織江さんは頬を蒸気させながら俺の手を握った。
「素晴らしい……！　素晴らしいわ亮真さん！　やっぱりあなたにお願いして正解だったわ！」
「ええっと、それはどういう？」
「百代さんの事よ！　しかも新しいお友達まで出来たなんて！　どこまで私を喜ばしてくれるのかしら！」
織江さん、大人しい方かと思ってたけど、けっこうはっちゃけるタイプなんだなぁ。
「……決めたわ。ねえ、亮真さん。明日、小雪さんをこのお店にまで招待してくれないかしら。もちろん百代さんも一緒にね」
「は、はあ。二人がいいのなら」
「お願いね（……ちょっと気になる事もありますからね）」

「はい？」

「おほほ。なんでもないわ」

小雪ちゃんをここにか……。俺一人なら事案かもしれんが、織江さんと知り合いの百代ちゃんがいる事だし大丈夫かな。

というわけで、百代ちゃんと小雪ちゃんを招待する事になったわけだが……まさか、これが織江さんという女性の印象を大きく変える事件に発展するとはこの時の俺は知る由もなかったのだった。

真剣で騎士（笑）に恋しなさい！　その四

今日も楽しそうに遊びまわっていた百代ちゃんと小雪ちゃん。今は休憩するために仲良くベンチに座っている。
「二人とも、ちょっといいかな？」
「どうしたのお兄さん？」
「実はね……」
織江さんが二人を招待したいと伝えると、百代ちゃんが目を輝かせた。
「おお、それはいいな！　最近おばば様に会えてないし！」
「小雪ちゃんはどうかな？」
「ボクもいいの？」
「ああ。ぜひともキミに会いたいとの事だよ」
「小雪、おばば様はとてもやさしい人だから心配するな。それに……今から行けばきっとオヤツにパンケーキを焼いてくれるぞ！」
現在の時間は午後二時二十分。……なるほど、三時のオヤツというわけか。
「そうと決まれば早く行くぞ！」

「あ、待ってよ百代ちゃ……っ！」

公園を飛び出していく百代ちゃんを追いかけようとした小雪ちゃんが腕を押さえて立ち止まる。

「小雪ちゃん？」

「え、えへへ、何でもないよお兄さん。さ、早く百代ちゃんを追いかけよう」

「……そうだね」

どうしたんだ小雪ちゃん？

・・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

何とか百代ちゃんに追い付き、三人そろってお店に戻る。店内には織江さんの他に学生服姿の女の子達がアクセサリーやシャーペンを手にしながら楽しそうに会話している。

「いらっしゃい百代さん！」

「お久しぶりです、おばば様！」

深々とお辞儀する百代ちゃん。こういうところはしっかりしてるんだなぁこの子。

「元気そうで何よりだわ。鉄心ちゃんや妹さんは元気？」

「ジジイは相変わらずですよ。あ、でも織江さんが遊びに来てくれないからって機嫌が悪いんですよね最近」
「あらあら、それは申し訳ないわね」
「織江さんは悪くないですよ。まったく、いい加減織江さん口説くのやめろって言ってるんですけどねぇ」
「そうねぇ。こんなおばあさん相手にしなくてももっと素敵な方々がいるでしょうに」
（うぷぷ。まるで本気にされてないみたいだな。ざまあみろジジイ！）
「百代ちゃん、妹さんがいるのか？」
「え？　ああ。そういえば神崎さんには言っていませんでしたね。名前は一子っていいます。今度紹介しますよ」
「そうか。楽しみにしてるよ」
「さてさて……それで、そちらにいらっしゃるのが新しいお友達ね？」
「は、初めまして、小雪です」
織江さんに見つめられ、小雪ちゃんはちょっと緊張した表情で自己紹介をした。
「うふふ、とっても可愛らしいお嬢さんねぇ。佐山　織江です。名前でもおばあちゃんでも好きな様に呼んで頂戴ね」
「おばあちゃん……ばぁば？」

おっかなびっくりといった様子で小雪ちゃんがそう発すると、織江さんは一瞬固まったかと思ったら目に見えて機嫌を良くした。

「――あらあらまあまあ！　嬉しいわ小雪さん！　ええ、これからはぜひばぁばと呼んでくださいね！」

「……百代ちゃん。織江さんって子ども好きなんだね」

「え、気づいてなかったんですか？」

いやまあ、キミを気遣うようにしてた時から子どもを大切にする優しい方とは思ってたけれど……。

「さあ、三人ともこちらにいらっしゃい。外は暑かったでしょう。いま冷たい飲み物を用意するわね」

そう促されて店奥のスペースに移動すると、そこにはすでに先客がいた。

「おー、百代ちゃんじゃーん」

「おっすー」

片手を上げてそう挨拶してきたのは二人組の女の子だった。制服を着ているから彼女達も学生のようだが、百代ちゃんの知り合いかな？

「百代ちゃん、このお姉さん達お友達なの？」

「うんにゃ、知らん」

「ええ!?」
　小雪ちゃんの質問にあっさり違うと答える百代ちゃん。ええ……じゃあ今の挨拶なんだったの？
「あははー。この辺りで川神院と百代ちゃんの事知らない人間いないしねー」
「そーそー。つーかこんな所で会うと思わなかったし。それで、そっちの可愛い子はどしたん？　友達？」
「髪白っ！　うわー、いいなー。私も髪染めよっかなー」
「え、あ、あの。お姉さんの髪も綺麗だよ？」
　二人に見つめられアワアワしながら答える小雪ちゃん。すると女の子達は揃って顔を見合わせたかと思うと口元を押さえながら天を見上げた。
「は？　何いまの可愛すぎかよ」
「うわー、やべー、連れて帰りたくなったわー。そんでもって着せ替えさせたいわー」
「アンタんとこ弟がいるでしょ」
「ふざけんなし。あんな生意気なクソガキとこんな天使一緒にすんな。目ん玉腐ってんの？」
「腐ってませんー。アンタのそのギットギトに黒い腹の中までしっかり見えてますー」
「……おう、やんのか人形趣味？」

「……やってやろうかミス・コールタール？」
　ええ……なんで小雪ちゃんを褒めるところからこんな状況になってんのこの子達……。
「あははは！　この人達面白いな！」
「ケ、ケンカしちゃだめだよぉ」
　それを見て大笑いする百代ちゃんと、何とか宥めようとする小雪ちゃん。なんだこのカオス。
「ん？　ああ、ごめんごめん。本当にケンカしてるわけじゃないだよ。ウチら普段こんな事ばっかり言ってるくらいだし」
「そ、そうなの？」
「そうそう。友達だから本気じゃないってわかってるし。だからこんなバカみたいな話だって出来るのよ」
「友達だから……」
　そう呟くと、何を思ったのか小雪ちゃんは百代ちゃんの前に立った。
「も、百代ちゃん！」
「お、おう。何だ小雪？」
「えっとえっと……百代ちゃんは足が速い！」

「……はい？」
　なんの脈絡もなく褒められた百代ちゃんは？マークを浮かべながら首を傾げた。
「追いかけっこでも全然追い付けないし。あと、凄い高くジャンプできるし。いっぱい走っても全然疲れないし。あと、ええっと、それから……」
「待て待て小雪さんや？　なんでいきなり私を褒めるんだ？」
「だ、だってお姉さんが友達ならこういう事言うんだって」
「いやまあ、確かに私も聞いてたけど。今のどこに馬鹿にする要素が？」
「……せっかくお友達になれたのに、悪口なんて言いたくないもん」
（（ピシャアアアアアアアアンッ!!!）
　あ、絶対今この三人の脳内に雷落ちたわ。
「……え、何この子。本当に天使なの？」
「……もう無理マジしんどい。小雪ちゃんだっけ？　今からお姉さんの家に遊びに来ない？　というか真剣にウチの弟と代わらない？」
「ええ!?」
「待て待てお姉さんがた！」
　ちょっとシャレにならない目の色をした二人に詰め寄られようとした小雪ちゃんの前に百代ちゃんが立ちはだかった。

「小雪は私の友達だ。連れていくなら私を倒してからにしてもらおうか！」
「百代ちゃん……！」
「だいいち、小雪を持って帰るのは私だ！　ワン子共々私の妹にして存分に可愛がってやる！」
「ふええ!?」
　百代ちゃんェ……。
「あらあら、楽しそうね。おばあさんも混ぜてくださいな」
　そして織江さん。この状況に自ら飛び込んで来る……だと……。
・・・・・・・・・
・・・・・・
・・・
　あれから場を落ち着かせ……たと思ったらようやく俺に気づいた女の子達（弟さんがいる方が片山　泉さんでもう一人が如月　綾香さん）が「織江さんどこでこんなイケメン拾ってきたの!?」とか「写真撮ってＳＮＳに上げさせてもらっていいですか!?」とか一騒ぎあったが、なんとかそれらをやり過ごしてみんなでまったりとした時間を過ごす俺達。
　しかし、そんなゆったりとした時間は突如として破られる事となった。小雪ちゃんの

事を相当気に入った片山さんが感極まったのか彼女の腕に抱きついた瞬間。
「痛っ……！」
苦しそうに顔を歪ませる小雪ちゃんを見て慌て片山さんが離れる。
「ご、ごめん小雪ちゃん」
「ちょっと泉！　アンタリンゴ片手で砕けるくらい力あるくせに何やってんのよ!?」
「な、何で知って……じゃなくて！　そんな全力で抱きしめるわけないでしょうが！」
「じゃあなんで小雪ちゃん痛がってんのよ！」
「ま、まって！　泉お姉ちゃんは悪くないの！　これは……」
「……小雪さん、ちょっと失礼するわね」
そう言って、織江さんが小雪ちゃんの服の袖をめくる。……そして露わになったのは、痛々しいあざがいくつも出来た彼女の腕だった。
「……何……コレ……」
絶句する如月さん。無理もない。こんなの日常生活で負うような怪我じゃない……！
「ちょっと！　凄い怪我じゃない！　何があったの小雪ちゃん!?　何かぶつけられたの!?」
「ち、ちが……これは……これは……」

「――――小雪さん」
「ッ！」
パニックになりかけていた小雪ちゃんを織江さんが優しく抱きしめた。傷に触らない様。優しく、ひたすら優しくその小さな体を包み込んだ。
「ここにいるのは、みぃんなあなたのお友達。誰もあなたを傷つけないわ。だからみんなに、このばぁばにお話を聞かせてちょうだいな」
「……うぇぇ」
耐えきれなくなったのだろう。小雪ちゃんの目から大粒の涙が溢れ出す。そして、彼女から語られたその話の内容にその場にいた全員の顔が険しくなる。
「……ふざけんなし！」
バンと勢いよく机を叩く片山さん。それでも気持ちが収まらないのか肩を大きく震わせていた。
「止めなよ泉」
「はあ!?　綾香、アンタこんなん聞かされて黙ってろっての!?」
「んなわけないでしょ。でも、大きな音だしたら小雪ちゃんが怯えるだろうが」
「あ……」
ハッとなる片山さんが押し黙る。――――実の母親からの日常的な虐待。それが小雪

ちゃんの怪我の原因だった。
「……何なのよ。何でこんないい子叩けんのよ。しかもご飯も満足に食べさせてあげないなんて……」
「……行ってくる」
百代ちゃんが席を立ち、店を出ていこうとする。
「百代ちゃん、どこへ？」
「小雪の家」
「……何をしに行くつもりかな？」
「――――決まってるだろ神崎さん。私の友達を傷つけたんだ。親だろうが関係ない。二度と小雪を殴れない様に両手両足の骨をグチャグチャに砕いてやる……！」
凄まじいまでの殺気を漏らしながら百代ちゃんが宣言する。出会ってまだ二日しか経っていない。けれど、彼女にとって小雪ちゃんはかけがえの無い存在になっていたようだ。
しかし、だからといってこのまま彼女を行かせてしまってはそれこそ取り返しのつかない事になってしまうだろう。そう思い、彼女を引き止めようとしたその時だった。
「――――その必要はないわ百代さん」
一瞬にしてその場の空気が冷え込む。怒りの形相だった百代ちゃんさえも凍り付か

せたその正体は……全身から圧倒的なプレッシャーとでも呼ぶべきものを放ちながらニコニコしている織江さんだった。

「織江……さん……？」

「うふふ……。そうねそうね。泉さんの言うとおりだわ。いかなる理由があろうと……いえ、理由があろうとなかろうと、虐待なんて許されるものではないものねぇ。いいわ。小雪さんのばぁばとして……やってやろうじゃありませんか」

そう言うと、固まる俺達を尻目に織江さんは傍にあった電話でどこかに連絡を取り始めた。

「……もしもし葵さん？　織江です。……もう、いつまでも昔の事に恩を感じなくてもいいのよ。あれはただのお節介なんだから。……それでね、実は今から診てもらいたい女の子がいるの。……ええ……ええそう。……まあ、車を回してもらえるの？　助かるわぁ。では待っていますね」

そして、連絡を取り終えた織江さんは静かに店の奥に引っ込んだ。一分もかからない内に戻ってきたが、その右手にはとんでもないものが握られていた。

「薙……刀……!?」

それはどこをどう見ても薙刀だった。昔武術を嗜んでいたとは言っていたが、まさかの薙刀だったとは。

「……うわぁ、久しぶりに見た。織江さんの出撃モード」
「終わったね母親。ま、これで小雪ちゃんの安全は保障されたわけか。……おーいみんなー！」
　片山さんが店内にいた他の学生達に呼びかける。
「見ての通り、これから織江さん出撃するから今日は店じまいでーす！　買いたいもんは明日まで我慢しなよー！」
「りょうかーい！」「え、今度はどこの馬鹿が織江さん怒らせたの？」「さあ？」などと会話しながら次々と店を出ていく学生達。
「き、如月さん、いったい何が……？」
「あ？　お兄さん知らないんだ？　織江さんって普段は菩薩みたいな人だけど、一度キレたらとんでもない事になるんだよねー」
「前はなんだったっけ？　確か孤児院に因縁吹っ掛けて潰そうとした奴らの所にお友達と一緒に乗り込んで逆に叩き潰したんだったっけ？」
　ファッ!?
「そうそう。ま、そういうわけだから。これから小雪ちゃんの母親の所に乗り込んで楽しいＯＨＡＮＡＳＨＩするんじゃないの」
　――若いころには武術なんかにも挑戦したりしてみたりね。

いや、今も現役じゃないですか！

「小雪さん、これから私と一緒に病院に行って怪我を診てもらいましょうね。それが終わったら、あなたのお家まで案内してもらっていいかしら」

「だ、ダメだよ。あの人、もしかしたらばぁばまで……！」

「まあ、ばぁばを心配してくれるのね。けど、大丈夫。わかってもらえるまでお話しするだけだから」

そうして、織江さんはくるりとこちらを振り向いた。

「そういうわけだから亮真さん、申し訳ないのだけれどお留守番お願いしてもいいかしら」

「え、ええ、構いませんが」

「百代さんはどうする？　私達について来る？」

「……止めときます。私が行ったら迷惑になるでしょうし。だから織江さん、小雪を……私の友達をよろしくお願いします」

心からそう願う様に頭を下げる百代ちゃんに織江さんはいつもの笑顔を返す。

「もちろん。可愛い子ども達のならおばあさんは何でも出来ちゃうんだから」

その時、外からクラクションが鳴る。どうやら迎えが来たようだ。

「じゃあ、行ってくるわね」

まるで散歩にでも行くような気軽さで小雪ちゃんと店を出ていく織江さん。

――それから数時間後、怪我の手当の為に小雪ちゃんを病院に預け戻って来た織江さんは一言。

「頑張ったわ」

とだけ言うのだった。

真剣で騎士（笑）に恋しなさい！　その五

早いもので、織江さんの所でお世話になるようになって早くも一ヶ月が経過していた。今日もまたお店の手伝いに精を出す。

「……さて、そろそろあの子達が来る時間かな」

チラリと時計を見遣りながら商品の配置を行っていると、店のドアが勢いよく開かれた。

「こんにちは～！」

「お邪魔します」

「しまっす～」

そちらを向けば、そこには予想通りの子ども達の姿があった。

「いらっしゃい。小雪ちゃん、冬馬君、準君」

声をかければ、三人は揃ってこちらへ駆け寄って来る。すっかりこの店の常連メンバーの登場に店内にいる他の人達も笑顔を見せる。

「こんにちは神崎さん。ふふ、今日もあなたのお顔を拝見できて嬉しいですよ」

「こんな顔でよければいくらでも見てくれていいよ」

「どもっす大将。いっつもお邪魔してすみませんねぇ」
「そんな事気にしなくていいよ準君。俺も織江さんもキミ達が来るのを楽しみにしているんだから」
「そうだぞ準～。ボクとお兄さんの時間を邪魔するんなら髪の毛むしっちゃうぞ～」
「また髪の話してる……。いや、待って。マジで髪の毛掴まないで」
「はは、相変わらず仲がよさそうでよかったよ」
「大将?!」
「二人とも、そろそろ神崎さんの邪魔になりそうですから奥に行きましょう」
「そうだね。ばぁばにも挨拶しないとだもんね～。行くよ準」
「痛い!?　自分で歩くから引っ張らないで！」
　いつものスペースに移動する三人の後ろ姿に顔が綻ぶ。……本当に、小雪ちゃんが心から笑えるようになってよかった。
　――あの日、小雪ちゃんを病院に連れて行った織江さんはそこで改めて彼女の全身に負わされた傷を目の当たりにした。明らかに虐待であると先生に断言された織江さんは、その手に詳しいお友達（詳しくは秘密との事）と共にそのまま小雪ちゃんの家に突撃、母親と直接話をつけてきたそうだ。
「片親だからと周囲に色々と言われていたそうよ。経済的にもあまり余裕は無くて、心

の負担が相当あったみたい。本当は娘にそんな事したくない。けれど止められない。そんな状態になっていたみたい」

だからといってそれが免罪符になるわけではない。結局、母親と小雪ちゃんは引き離される事となった。

「いつか、あの人が心の底から変わる事が出来て、小雪さんがもう一度会ってもいいと言うのなら……その時こそあの二人はもう一度向き合う事になるでしょうね」

「……そうですか」

それから小雪ちゃんは、お世話になった病院の関係者さんの所へ養子として引き取られる事となった。そして、彼女はその準備と怪我の治療の為に数日入院していた間に新たな友達を作った。それが、先ほど一緒に店にやって来た葵　冬馬君と、井上　準君だ。

この二人も病院関係者のお子さん……というか、冬馬君の方は病院の跡取り息子さん。準君は副院長の息子さんという凄い子達だった。

最も、どちらもそんな事をひけらかして横柄な態度をとるような子じゃないし、むしろキミ達小学生だよね？　と言いたくなるくらいしっかりした子達だった。今では店のちょっとしたアイドルみたいになっていた。まあ、冬馬君なんか将来絶対イケメンになるし、準君も愛嬌あって面白い子だしな。

そんでもって、二人とも織江さんと面識があった。まあ、連絡してすぐに迎えを寄こ

してくれるくらいだから親交はあったとは思っていたが……。
「開院したころ、色々織江さんに助けて頂いたと父から伺っています。……もし、あの時手を指し伸ばしてくださらなかったら、良からぬ事に手を染めていたとも……」
「だから俺は、俺達は織江ばーさんの為なら何でもやるつもりっす」
こうして、織江さんの武勇伝がまた一つ増えましたとさ。……本当に凄い人なんだなぁ。未だに普段のポワポワ具合からしたら信じられん……。
まあともかく、晴れて友達となった小雪ちゃんもとい榊原　小雪ちゃん。葵　冬馬君。井上　準君。正直、同年代の友達が出来たんだから俺もお役御免かなーとか思っていたんだが、小雪ちゃんは二人を誘って未だに会いに来てくれている。
「お、お兄さんは特別なの。だって、あの時お兄さんが百代ちゃんにボクと一緒に遊んでくれるようにしてくれたから。ボクをばぁばに会わせてくれたから、今ボクはこうして冬馬や準と一緒にいられるんだもん。……だから、お兄さんはボクの大事な人なの……」
――正直、泣きそうになった。そんでもって、それを織江さんに教えたら……。
「小雪さんの言う通り。あの子を助けるきっかけになったのは間違い無くあなたよ亮真さん」
「……ですが、結局織江さんに全てお任せしてしまって……」

「うふふ、あなた達だけで解決されちゃったらそれこそ私の立つ瀬がないわ。……いい、亮真さん？　「使えるものはなんでも使う」「本当に大事なら守るために手段は選ばない」。……こういう時は素直に大人を頼りなさいな」

そう言って優しく俺の手を握ってくれる織江さん。不思議な事に、それだけで沈んでいた気分が少し持ち直せた。

「……そう、ですね。すみません。あちら（D×D世界）でも大事なものが沢山ありすぎて、俺の手で守らないとってばかりでしたから、ちょっと難しく考えすぎていたかもしれません」

「その意気よ。出来る事はやればいい。出来ないのなら誰かにお願いすればいい。単純だけどとっても大切な事よ。小雪さんの事だってそう。これからも〝優しいお兄さん〟として接してあげて頂戴ね。あ、小雪さんだけじゃなく百代さんの事もね」

「ええ、もちろんです」

そういうわけで、織江さんの言う〝優しいお兄さん〟を目指す事になった俺なのだが、正直どうすればいいのか検討もつかんというのが現状であった。

「そういえば、今日は百代ちゃんはいないの？」

「忘れたのですかユキ？　百代さんは今日川神院での修行でこれないと言っていたではありませんか」

「あっ。えへへ、そうだったね～」
修業か。……百代ちゃん、めっきり鍛錬に付き合えって言わなくなったからなぁ。
「――――決めたんです。中途半端な姿をあなたに見せたくない。次に手合わせする時は、あなたに本気を出してもらえるような強さを得てからだと。……だから、待っていてください。私は、きっとあなたに並びたてる……いえ、超えられる人間になってみせます」
そう宣言した百代ちゃんは本当に俺に対し鍛錬等の話をしなくなった。といっても、ここへは時間が出来るたびに遊びに来てはいるのだが。
……そういえば、その宣言くらいから百代ちゃんの態度も変わったなぁ。具体的には年相応に甘えてくるようになったというか。みんなでおしゃべりしている時になぜか俺の膝の上に乗ってきたりとかするようになったり、荷物を運ぶのを手伝ってくれたかと思ったら頭を撫でろと言ってきたりとか。
その度に小雪ちゃんが「ボクも！」と真似してきたり、冬馬君も「では私も」と迫ってきたり、ただ一人準君だけが「大変っすね」と何故か可愛そうなものを見るような目で労わってくれたりする。
ただ、こうして無邪気に甘えて来てくれると、やっぱり嬉しいもんだな。まさか、この年になって世間のブラコン、シスコンの皆さんの気持ちを理解する事になるとは思わ

なかったわ。
　そして、この日もたっぷり織江さんや俺とおしゃべりした三人は満足そうにそれぞれの家に帰って行ったのだった。
・・・・・・・・・・
・・・・・・
・・・
　三日後、今日は修業が休みだという百代ちゃんが一人店にやって来た。
「いらっしゃい百代ちゃん」
「どうも。今日は小雪達は？」
「もうしばらくしたら来ると思うよ」
「（よしっ！）そうですか。なら、あいつ等が来るまで私が神崎さんの話し相手になってあげましょう」
　え？　いや、あの俺仕事中……。
「さあ、行きますよ。おばば様！　神崎さん借りますね！」
「どうぞ～」
　織江さん!?
「聞いてくださいよ神崎さん。ジジイのヤツまた昨日私に対して……！」

定位置だとばかりに席につかせた俺の膝上に乗ってくる百代ちゃん。……しょうがない。これじゃ逃げられないし、お望みの様に話を聞いてあげよう。

・・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

それからしばらくして百代ちゃんの話（だいたいお爺さんに対する愚痴）を聞いていると、小雪ちゃんの「こんにちは～！」という声が耳に届いた。

「お、どうやら来たみたいだな」

百代ちゃんは俺の膝から降りると小雪ちゃん達を迎えに行った。俺もそれに続く。

「来たな、小雪！」

「あ、百代ちゃん！」

「ついでに準も」

「俺はついでかよパイセン!?」

「だってお前可愛くないし。……ん？　冬馬はどうした」

「ああ、それなら」

「さあ、どうぞお入りください」

「……うん」

遅れて店に入って来る冬馬君だったが、その後ろには初めて見る女の子の姿があった。やけに暗い顔をしているが……。
「初めまして。三人のお友達かな？」
「いえ、友達といいますか……」
「？」
「……大将、ちょっと話聞いてもらっていいすか？」
……何やら事情がありそうだな。そう判断し、俺はみんなを連れてスペースに向かった。
女の子を中心に小雪ちゃんと準君。対面に俺と百代ちゃんと冬馬君という席順で座ったところで、俺は口を開いた。
「初めまして。俺は神崎　亮真。ここでお世話になってる者です。キミの名前を教えてもらっていいかな？」
「……椎名　京です」
「よろしく京ちゃん。それで三人とも、話というのは彼女に関係ある事かな？」
「うん。あのね、お兄ちゃん。実は……」
そうして三人から語られた話に俺は思わず拳を握りこんだ。
「……イジメか」

「ええ。私達がここに来る途中通りすがった公園で、椎名さんを取り囲んだ四、五人の少年達が彼女を罵っている場面に遭遇しまして」
「椎名菌が移る～とか意味わからん事言ってましたよ。で、あまりに胸糞悪かったんで三人で突っ込んでこの子を連れて逃げて来たってわけっす」
「えへへ～。準相手にドロップキック練習しててよかったよ～」
「そうだな。やけにガタイのいい奴がいたが、そいつの顔面に思いっきりめり込んでたもんな。……そんなもんをいっつも食らってる俺って凄くね？」
「うんうん。だからこれからも練習に付き合ってね」
「いつか本当に死んじゃいそうなんで勘弁してくれませんかねぇ！」
「……クスッ」
　その時、京ちゃんの顔に僅かな笑みが浮かんだ。
「あ、笑った」
「ッ！　ご、ごめんなさい」
「？　何で謝るんだ？」
「だ、だって。助けてくれたのに私……」
「気にしないでください」
「そーそー。ボク達がやりたいからやっただけだし」

「そういうこった。むしろちょっと元気になったからよかったぜ」
「……ありがとう」
とここで、腕を組んで黙っていた百代ちゃんが京ちゃんに尋ねる。
「椎名だったな。お前、何で反撃しないんだ」
「え？」
「黙ってやられるばかりだから馬鹿どもが調子に乗るんだ。私だったら全員その場でボッコボコにしてやるがな」
「いやいや、パイセンの強さをこの子に求めるのは酷でしょうが」
「それに、下手に仕返しすると逆上してよりエスカレートする恐れもありますからね」
「……私にはよくわからん」
憮然とした様子の百代ちゃん。まあ、この子にそう言った話は無縁だろうしな。
「そもそも、何でキミいじめられてるの？」
「それは……」
「ユキ、無理に聞き出すのはよくありませんよ」
「えーでもー」
「……ううん、話す」
「いいのですか？」

「あなた達は、あいつ等とは違うから」
　そうして、京ちゃんは自分がどうしていじめられいるのかを教えてくれたのだが……はっきり言って、その理由というのが――――。
「馬鹿じゃねえの？」
「馬鹿ですね」
「あはは～、馬鹿だね～」
「馬鹿だな」
　準君を筆頭にそうキッパリと切り捨てる四人。
「え？　え？」
　予想外のリアクションだったのか、京ちゃんは呆けたような表情を浮かべた。
「つまり、椎名の母親が浮気してるから、その子どものお前も汚いヤツだ～ってほざいていると？」
「……うん」
「いや、椎名関係ないじゃん」
　そう。準君の言ったそれが全てだ。悪いのは母親であって、京ちゃんが責められる理由なんかこれっぽっちもない。
「そもそも、それは家庭内の問題で、部外者が面白可笑しく囃し立てるものではありませ

んしね」
「うんうん。だから京ちゃんはぜ～んぜん悪くないね～」
「私でも馬鹿らしいと思えるのに、お前のクラスメイト共はそこまで頭の足りてない奴らしかいないのか？」
「一人だけ何も言ってこない子がいるの。どっちかっていうと無視されてるって方が正しいと思うけど」
「じゃあそいつも馬鹿だな」
「そう……なのかな？」
「そうだよ」
「ええ。椎名さんは完全なる被害者で非は一切ないのですから」
「だな。つーか椎名、そんな馬鹿しかいない学校なんか行く必要無いと思うぞ」
「え？」
「そうですね。転校するのも一つの手ですし。そもそも学校に通わなくても学ぶ手段はありますしね。何でしたら私が勉強を教えて差し上げますよ？」
「こう見えて、俺達頭いいんだぜ？」
「うんうん。準は頭〝だけ〟はいいもんね」
「キミは一々一言多いねぇユキさん」

「ボクがこんな事言うのは準だけだよ」
「あっはっはぁ。セリフだけ聞くと最高なのにすこっしも嬉しくねえ」
「……それって、逃げるって事？」
「逃げる事は悪い事じゃないよ」
　流石にこのままだと役立たずで終わってしまうから、俺からもちょっとばかし助言をしないと。
「逃げるっていう事は大事な選択肢の一つだよ。もし、京ちゃんの今の話を聞いて、それでも逃げずに立ち向かえだのやられっぱなしで終わるのか？　だの言う様なヤツが目の前に現れたら、俺は全力でそいつを殴り飛ばす」
「なるほど、つまり殺す気ですね、神崎さん」
　いや違うからね百代ちゃん!?
「本当に辛くても立ち向かわないといけない事は確かにある。けどね、そんなものは頻繁にあるわけじゃない。だったら、その時以外は逃げ出したり投げ出したりしても最後にはうまくいったりするものさ」
「……お兄さんも」
「ん？」
「お兄さんも、そういう事があったの？」

「もちろん。俺にとって、立ち向かわないといけない時は、大切な友達を助けるためって決めている。その為にテロリストだったり、悪魔だったりと戦ったり……」
「テロリスト？」
「悪魔？」
　……しまったと思った時にはもう遅かった。百代ちゃん達が興味深そうな目を向けてきている。
「神崎さん、今の話聞かせてください！」
「こ、今度ね。今は京ちゃんの話だから」
　百代ちゃんを宥め何とか話を戻す。
「どうかな、京ちゃん。俺の話を聞いて、今キミをイジメている周りの子達にキミが立ち向かう必要はあると思うかい？」
　俺の問いに、京ちゃんは数秒顔を下に向けた後、ハッキリとした表情で答えた。
「……必要無い。私はあんな人達の相手なんかしたくない。そんな事するくらいなら本を読んでいる方がずっと楽しい！」
　そうだね。それでいいんだよ京ちゃん。
「決まりだな。じゃあ、早速動こうぜ。まずは親……そういえば椎名、お前の父親はお前がいじめられてるの知ってんのか？」

「知ってると思う。……けど、今は離婚の手続きで忙しいからって……」
「……つまり、知ってはいるけど無視してるってわけか」
はぁぁぁぁぁぁぁぁ（クソデカため息）。そりゃ悪手だろ京ちゃんのお父さんよぉ。
「なら、まずは父親にはっきり断言してやらないとな。お宅の娘さんがいじめられてるのに何をやってんだって」
「そうですね。ですが、私達だけ会ってもらえるでしょうか」
「私が締め上げてやろうか？」
「それは最後の手段だわパイセン。そうだな。ここはやっぱり大将も一緒に来てもらうとして……」
「……いや、俺よりも適任がいるよ準君」
――使えるものはなんでも使う。本当に大事なら守るために手段は選ばない。
「そうですよね、織江さん？」
背後から感じる気配に俺は語り掛ける。
「……ええ、その言葉を待っていたわ」
「おばば様……！」
「話は聞かせてもらったわ。みんな、京さんの為に一生懸命アイディアを出してくれて

ありがとう。どうか、このおばあさんにも一枚噛ませてくださいな」
「……勝ったな」
「ええ」
「さっすがばぁば～！」
　机の上で手を組む準君に、頷く冬馬君。そして万歳しながら満面の笑みを見せる小雪ちゃん。
「椎名　京さん。椎名……お父様は椎名流弓術の？」
「は、はい」
「だと思ったわ。けれどそうね。そういう事ならあちらからもちかけて……そのまま……」
　早速考えを練り上げる織江さん。なら、俺もお兄さんとして全力で働かないとな。
「そうだ、京ちゃん。さっき本を読むのが楽しいと言っていたけれど、もしよければ俺と一緒に図書館にいかないか？」
「いいですね。ちょうど私も調べ物をしたいと思っていたところなんですよ」
「ちゃっかりついて行く気ですね若。ま、そういう事なら俺も付き合いますがね」
「え～！　それより一緒に外で遊ぼうよ～！　あ、あの公園じゃなくて別の場所でね！」
「そういう事なら私も付き合ってやろう」

みんなに取り囲まれて目を丸くする京ちゃん。
「……いいの？　私……」
「ま、これでハイサヨナラってのもなんだしな」
「ええ。出会いというものは大切にしたいですから」
「ボク、京ちゃんとお友達になりたいし」
「そういう事だ。逃げられると思うなよ椎名」
こうして、佐山雑貨店に小さな常連さんがまた一人増える事となったのだった。

真剣で騎士（笑）に恋しなさい！　その六

町の片隅でひっそりと営業している佐山雑貨店。学生……とりわけ女学生達の間では人気の店となっている。それは、店主がとても優しいおばあさんだからでもあるし、商品が好みでもあるし、だらだらと話せるスペースがあるからでもあるし、最近謎の美青年がバイトしだした事でもあり、女生徒達の足は必然的にこの店へと向けられるようになっていた。

そんな佐山雑貨店に女生徒達と同じように常連となった小学生グループがあった。もっとも、その子達の目的は雑貨や文房具ではなく、自分達の慕う〝お兄さん〟に会いに来る事であったが。

「美少女参上！」

やって来たのはグループのリーダーのような立場の女の子だった。彼女はキョロキョロと店内を見渡すと、商品棚の前で品物の並べ替えを行っている人物に声をかけた。

「こんにちは、おばば様。……神崎さんは？」

女の子の挨拶に、店主である織江も笑顔で返事をする。

「こんにちは百代さん。亮真さんには用事をお願いしたから今出ているの。多分戻ってくるまでそんなに時間はかからないと思うけれど」
「……そうですか」
　つまらなそうに頬を膨らませる百代に、織江は口元に手を当てながら上品に笑う。
「あらあら、大好きなお兄さんがいなくて寂しいのね」
「は、はあ～!?　な、何を言ってるんですかおばば様！　私はただ……！」
「うふふ、おばあさんにはわかっていますよ。さ、お友達はもうみんな揃っています。早く行ってあげなさい」
「むう～……。まあいい。それじゃお邪魔します」
　そう言って百代は店奥……以前まで使用していた雑談用の座席を通り過ぎ、店に併設されている居住スペースに足を踏み入れた。これはグループの人数が増えた事と、そもそも座席は他の客も使用するためいつも使えるわけでは無い事もあったので、織江の厚意で居間を借りるようになったのだ。もちろん、迷惑をかけない事前提ではある。
　靴を脱ぎ、ふすまを開けると、そこにはいつものメンバーが集結していた。
「あ、百代ちゃんだ～」
「こんにちは百代さん」
「遅かったなパイセン。今日は妹は？」

「ワン子は今日一日中ルー師範と鍛錬だ。で、遅れた理由は出る前にジジイに捕まったから。あー、走って来たからのどが渇いた。準、お茶」
「俺かよ!?　……まあいいや。ちょっと待って……」
「はい、どうぞ」
　仕方なく立ち上がろうとした準だったが、その前に一人の女の子が百代にお茶を差し出した。
「おお、さすがだな京!」
「私、出来る女なんで」
　一気にお茶を飲み干す百代を眺めながら、虚空に向かって京はVサインをした。偶然から百代達との出会いを果たした彼女がこの場所に通うようになって既に数週間が経過していた。
　京を苛んでいたイジメは転校という手段を以て終焉を向かえ、両親の離婚が成立し、父親に引き取られた彼女は隣接する県の小学校へ通っている。
　それに伴い、引っ越しも行ったのだが、それならばなぜ遠く離れた場所に家のある京がここにいるのか。それは彼女が望んだ事だった。即ち、せっかく出来た友達とこのまま別れたくないと。娘の事情を知っていながら無視していた負い目のある父親はそれを承諾し、学校の終わる毎週金曜日に娘を近くまで送り届ける役を担っている。

また織江も、日帰りでは父親の負担が大きいだろうと、せっかくならば連休中は泊っていけばいいと京の宿泊場所に自宅を提供。

最初の方こそ緊張していた京だったが……

「そうだ、さっきおばば様から聞いたけど、神崎さん外出中だって？」

「うん。最初はおばあちゃまが行くつもりだったけど、自分が行ってくるって兄様が」

母親と違いたっぷり甘えさせてくれるおばあさんと、優しく遊び相手になってくれるお兄さんと過ごしている間に、今ではすっかり二人に懐いており、それは両者の呼び方にも表れていた。

「私もついて行こうとしたけど、せっかく一週間ぶりに友達と会えるんだから遊んでなさいって」

「……まあ、あの人ならそう言うだろうな」

「兄様の優しさは嬉しい。それに、夫の帰りを待つのは妻の役目だし」

ポッと両頬に手を当てながらクネクネと動く京。小学生にしてはませた発言ではあるが、これが冗談でも何でもない事はここにいるメンバーはこの数週間で理解してしまっていた。

「まさか、京がこんな性格だったとは思わなかったなぁ。ここに初めて連れて来た時はもっと大人しそうだと思ったんだがな」

「それだけ追い込まれていたという事ですよ。こうして自分を曝け出してもらえるのは嬉しい事ではないですか」
「だな。……まあ、あそこまではっちゃけた真似をするとは思ってなかったけど」
そう言って準が回想するのは。転校の手続きが完了し明後日には引っ越すとなった日の事であった。その日、子ども達だけで集まった場所で京はある計画を語った。
「実は、明日学校に行ってこようと思う」
最早行く価値の無い場所へわざわざ向かうという京に全員が怪訝な表情を浮かべる。
「おいおい、今更あんなところに何の用だよ」
「実は、とっても面白い話を聞いた。……私が登校しなくなった後、私を自殺させる会とかいうのが出来たとか」
「……何と愚かな」
「あはは～、ここまで来ると気持ち悪いね～」
「なんだ、殴りこむつもりか？　それなら私も付き合うぞ京」
それぞれに怒りと気遣いを見せる友達の様子に、京は微笑む。こうやって自分を大切に思ってくれる人達が出来た事が少女はただただ嬉かった。
「みんなと出会えて、私は本当に救われた。けど、それと同時に、何であんな連中にビクビクしていたんだろうって思ったの。だから、あいつ等全員捨てるのと同時に、弱い自

分も捨てたいの」
「お前……」
「それが京さんの決意ならば、私は応援しますよ。ですが、具体的にどうされるつもりですか？」
「あいつ等は私に自殺させたいって思ってる。……だったら望み通り自殺してやろうって」
「はあっ!?　お前何をっ……。いや、待てよ。まさかお前……」
　京のとんでもない発言に目を見開く準だったが、次の瞬間その真意に気づいた。
「うん、準が思っている通り」
「うわぁ……マジか。そりゃ下手したら連中トラウマになるぞ」
「あんな連中どうなろうと知った事じゃない」
「？　ねぇねぇ、どういう事？」
「つまりですねユキ。京さんは……」
　疑問符を浮かべる小雪に冬馬は説明する。京はクラスメイト達に自分が自殺したと思わせる事にしたのだと。それが望みなら叶えてやろうと言っているのだ。
「既に校長には説明役を頼んである。イジメの事教育委員会に黙っててやるって言ったら快く引き受けてくれた」

こういう時は担任ではないかと思われるが、いじめを把握していながら対応しなかったとして処分されている。ちなみにクラスメイト達には急病の為と偽って伝えてある。「今更あいつ等が反省するとは思わない。多分責任のなすりつけあいをするはず。そうなったら教室に入ってやるんだ」

「え、ネタバレすんの？」

「で、私を見てあいつ等はホッとする。そして今の今まで誰が悪いとか言っていたくせにきっと私に言うんだ。「何で死んでないんだよ」「早く死ねよ」って。だから私もこう言ってやるの……」

そして当日、まさに京の言う通りの状況を向かえた所で、京は黒板を思い切り叩いた。今まで何を言われても決して反抗せずに俯いてばかりだった彼女しか知らないクラスメイト達はその行動と音に一瞬だけたじろぐ。しかし再び罵倒しようと口を開こうとしたが……。

――――お前らが死ねよ。

最早無価値な存在と成り果てた目の前のクラスメイト達。そんな彼等にいい様に弄ばれていた弱い自分と決別するため、京はひたすら冷たく、ありったけの殺気を込めてそう言い放った。

幼いながらも父から弓術という武を厳しく叩き込まれた少女の殺気に、イジメなどと

いう卑怯な真似を楽しんでいた人間が耐えられるわけもなく、教室内は椅子から転げ落ちたり失禁したりする者が後を絶たない。

そして、一人の少女を全員で追い詰めようとした場面を直接目の当たりにして絶句する校長を一瞥し、用事は済んだとばかりに京は教室を出て行くのだった。

――直後、その後を追って一人の少年が教室を飛び出し、今まで見て見ぬふりをし、ここまで何もしなかった事を謝罪したが、それが京に届くことはなかった。

「……いやあ、自業自得とはいえやっぱりドン引きだわ」

「言葉というのは簡単に人を傷つけます。私達も気を付けないといけませんね」

「は～い！」

「小雪は可愛いなぁ。どれ、お姉さんが撫でてやろう」

それぞれに感想をあげつつ、話題はすぐにべつの事柄に移った。……もしも少年がもっと早く行動していれば……もしも京が小雪達と出会わなければ、……もしも、二人のイレギュラーが存在していなければ、京が少年の手を取る未来もあったかもしれない。ほんの少しの歯車の狂いが、少女と少年の運命を変えてしまったのだった。

「それより、そろそろ夏休みだけど、お前達何か予定あるのか？」

百代の問いかけに四人の目が輝く。同年代より少し……いや、大分大人びている彼ら彼女らでもやはり夏休みの前では年相応の反応を見せるのだった。

「そうですね。私や準が今のところ思い浮かぶのは病院関係者が招かれるパーティーに出席する事ですかね」
「おっと若、今回はユキも一緒だぞ」
「え、そうなの？　美味しいもの食べられる？」
「ええ。きっとユキにも満足いただけると思いますよ」
「ウェ～イ！　ねえねえ準。マシュマロは？　ボク、マシュマロタワーが見たいな～」
「そんなふにゃふにゃタワー絶対登りたくねえなぁ」
　大量のマシュマロを見上げる自分をイメージする小雪と、それが倒れてくる想像を浮かべる準であった。
「うーん、私は川神院でひたすら修業かなぁ。……いや待て。こんな美少女の夏休みが修業だけで終わるっておかしくないか」
　大量の汗を流しながら鍛錬するゴリゴリの修行僧達の横で、同じく汗を流しながら鍛錬する己の姿に頭を振る百代。
「外出許可は出ないの？」
「いや、数日は大丈夫だったはずだ。……仕方ない、ここは神崎さんに海にでも連れて行ってもらうしかないな！」
　ボンッ！　キュッ！　ボンッ！　な自分（妄想）と〝お兄さん〟が波打ち際ではしゃ

ぐ姿を思い浮かべた百代は密かに悶えた。
「百代ちゃんだけずるい！　ボクも！　ボクもお兄さんとお出かけしたい！」
「そういう事でしたら私達もぜひ参加したいものですね」
「それなら、いっその事織江ばーさんも巻き込んじまいましょうよ若」
「よし決まりだな。後でおばば様に相談しよう」
「了解。……ところで、京ちゃん。さっきから黙ったまんまだけどどうかしたの？」
「もしや、何かご予定が？」
　何か遠慮でもしているのかと、全員の視線が京に集中するが、当の本人は涼しい顔でそれを否定した
「ううん。大丈夫。夏休みの間はずっとこっちにいるから」
「なんだ、そうなの……か……」
　なら問題ないなと続けようとした百代の口が固まる。
「ずっと？　え、夏休みが終わるまでここで暮らすのか？」
「すでにおばあちゃまに許可は貰ってる。ぶい」
「お～。じゃあ予定がない日は毎日でも遊べるね～」
「待て待て、そうじゃないぞ小雪。おい京、それってつまり……」
「むふふ、一ヶ月以上兄様と一つ屋根の下なのです」

ドギャアアアアアンとポーズを決めながらドヤ顔を見せる京。
（や、やられた！　こいつ、最初からそのつもりで……！）
「朝は兄様と一緒にラジオ体操をして、昼は兄様と一緒に店番をして、夜は一緒の布団で寝る。そしてあわよくば一緒にお風呂に入る。こうして毎日アピールし続ければ、夏休みが終わる頃にはきっと兄様も私に夢中……。あ、ダメ兄様。みんなが見てる……」
「……相変わらず大した妄想力だな」
「準、想像力は人を成長させますよ」
「想像力と妄想力は似て非なるものだと思いますがねぇ若」
少しばかり危ない表情を浮かべる京を見て引き気味な準と、素直に称賛してしまう冬馬。そこへ小雪が割って入る。
「ず、ずるい！　ずるいよ京ちゃん！」
「ずるくない。作戦と言ってほしい」
「む～……ふ、ふん。いいもん。ボクだってお兄さんと寝た事あるもん！」
「ファッ!?　こ、こらユキ！　なんてはしたない事を言うんですかお前はぁ！」
つ○まるキャラみたいに噴き出す準に、小雪はただ首を傾げる。
「？　よくわかんないけどホントの事だもん。この前一緒に河原をお散歩した時に気持よさそうだからって土手で横になったんだけど、ボク途中で寝ちゃったんだ。えへへ、

お兄さんの膝枕気持ちよかったなぁ。……それに、お昼寝仲間も出来たしね～」
「お昼寝仲間？」
「うん。ボクがお兄さんに膝枕してもらってたら、どこからか女の子がふらふら～ってやって来て、そのまま反対の膝にポテリって頭を乗せたと思ったらすぐに寝ちゃったの」
「それは……なんとも不思議な方ですね」
「つーか、大将もよく起こさなかったな」
「なんかあまりにも気持ちよさそうに寝てて起こすのが悪いからって。……あ、そういえばその後もう一人男の子がボク達から少し離れた所に座ってボーっと川を見てたっけ。なんかひどく落ち込んでた感じだったよ。なんとなーくどこかで見覚えのある子だった気がするなぁ」
「おいおい、まさかそいつまで膝枕したってか？」
「むふふ、お兄さんの膝は死守したもんね。でも、お兄さんは何か話しかけてたよ。男の子の方も……確かお父さんの教えがどうとか自分のやり方がどうとか言ってた気がするけど、なんか難しそうな話だったからボク途中で寝ちゃったんだ。で、目が覚めたら男の子はいなくなってた。女の子の方もボクが起きて少ししてから目を覚まして、「気持ち良く寝れたよ～。また膝枕してね～」って帰っちゃった。だから結局名前は聞けな

かったんだ」
「兄様の膝枕……羨ましい」
「……ふん。節操のない人だな」
　自分もやってもらいたいと口にする京と、どことなく不満そうな百代。その様子を眺めながら準はそっと冬馬に耳打ちした。
「ユキや京はわかりやすいけど、パイセンも大概だよな。川神院じゃひたすら厳しく躾けられてるって聞いてるし、素直に甘えりゃいいのに」
「準、乙女心というのは複雑なのですよ」
「乙女心ねぇ。……そういや若、この前店に来たおねーさま方の事覚えてるか？」
「この前ですか？　ふむ、このお店は女性の方が沢山来店されるのであなたの言うお姉様という方が誰なのか……」
「ほら、あの時俺が〝鞭〟が似合いそうだなってこっそり指さしたあの人だよ」
「……ああ！　あの方ですか」
　友人二人と来店したその女生徒は店内を見渡して残念そうに溜息を吐いたという。
　――今日はあの人はいないのか。
　――お～？　なになに梅子。あのカッコいい店員さんに用があったの？
　――へえ、勉強と鞭術にしか興味の無いあの梅子がねぇ。

――な、何を勘違いしている！　私はただ、この前ここに来た時に忘れ物をしたのをわざわざ追いかけて来てくれた事の礼を言おうとしただけだ。
――ああ、最初ストーカーだと思って鞭でぶっ叩こうとしたんだっけ？
――で、それを簡単に避けられて、アンタが呆気に取られている間に忘れ物渡して帰っていったんだったよね。
――ッ～～～～！　その話は止めろ！　第一、私はどちらかというと年下の方が……！
――はいはい。
――話を聞けぇ！
「……あの時、俺や若は微笑ましいねぇってそのやり取りを見てたけど、この三人、チベットスナギツネみたいな顔でおねーさま達に目を遣ってたよなぁ」
「実にシュールな光景でしたね。最も、神崎さんの人気はそれだけに留まりませんが」
「そりゃなあ……。そんじょそこらのアイドルなんか相手にならないくらいのイケメンで、俺達とのやり取りで優しくて面倒見がいい事も知られてるし。年頃のおねーさまには優良物件にしか見えねえだろうな」
「惜しむらくは……その人気に本人が一切気づいていない事ですね。今度父に鈍感に効く薬が無いか聞いてみましょうか」

おどけてみせる冬馬に対し、準は真剣な表情でそれを否定する。
「無駄だぜ若。ありゃ病気どころか呪いだから薬なんか効きゃしねえって」
「……それはそれで不憫だと思いますが」
「大将に惚れちまった人間は苦労すると思うぜ。ま、それを傍から見てニヤニヤするのも面白そうだが」
「おや、準は羨ましいとは思わないのですか？」
「あ？　ん～～～そうだな。この前のおねーさまも相当な美人だったし、身内贔屓なしでユキ達も美少女だと思うけど……恋愛対象かって言われると違うんだよな」
「ふむ、ではあなたも年下の方が好みだと？」
「年下……う～ん、そうなのかな。なんかそれも違う様な」
「まあ、一般的に私達の年齢で恋愛対象について真剣に考える子は珍しいでしょうし、あなたも成長すればいずれ自覚する日も来るでしょう」
「だな。今は恋愛云々よりもこうして若達とつるんでる方が楽しいですし」
「ふふふ、そうですね。私もです」
「……ん!?」
友達との一時を大事にしようと冬馬と準が頷きあった直後、何かに気づいたようにピクリと体を動かす百代。

「どうしたの百代ちゃん？」
「神崎さんが帰って来そうな気がする」
「何でわかるんだよパイセン……」
「カン！」
　そして数秒後、店の方から本当に〝彼〟の声が聞こえて来た。
「ただいま戻りました」
「お帰りなさい、亮真さん。あの子達、みんな揃っているわよ」
「そうですか。なら、ちょっと声だけかけてきますね」
　足音が徐々にこちらに近づいて来る。そして、ふすまがゆっくりと開けられると、そこには子ども達の大好きな〝お兄さん〟の姿があった。
「やあ、みんないらっしゃい」
「ども、大将」
「お邪魔しています」
「お帰りなさい、お兄さん」
「兄様、お菓子にする？　お茶にする？　それとも……私？」
「この美少女を待たせるなんていい度胸ですね神崎さん」
　一斉にしゃべりだす子ども達にただ微笑むお兄さん。帰宅して早々にごちゃごちゃ

と話しかけられているのに嫌な顔一つせずに応えてくれるその優しさが百代達には心地良かった。
「ありがとう、京ちゃん。じゃあお茶を淹れてもらっていいかな」
「任せて（……残念）」
「それと百代ちゃん。本当ならもう少し早く帰って来られたんだけど。途中でやけに足の速い男の子に捕まってしまったんだ。そのまま何故かかけっこ勝負する事になって気づいたらこんな時間に……」
「足の速い？　……そいつ、もしかしてバンダナしてました？」
「ああ。もしかして百代ちゃんの知り合いかい？」
「いや、私も前に一人で走り込みの最中にいきなり勝負を挑まれまして。身の程を教えてやろうと受けてやったんですけど、思ったより速くて中々面白いヤツだったと覚えてます」
「はは、なんだか風のような男の子だな」
「ねえねえお兄さん！　ボク達夏休みの予定の事を話し合ってたんだ！　それでね……！」
　お兄さんの手を引っ張って自分達の輪に加える小雪。そうして、彼等はいつもの様に仲間同士の楽しい会話を時間が許す限り交えるのだった。

真剣で騎士（笑）に恋しなさい！　その七

――なんで、こんな事になってしまったんだろう。

広々とした鋼鉄のフィールドに立ちながら、俺は心の中で嘆く。……いいや、本当はわかっている。全ては自分の不用意な発言が招いたのだと。

「頑張れお兄さ～ん！」

俺の立ち位置から大分離れた場所よりこちらに向かって手を振る小雪ちゃん。彼女だけではない、百代ちゃんや冬馬君達もそろって俺に声援を送っている。

「いよいよ神崎殿の実力を目の当たりに出来るぞ。楽しみだなマルさん！」

「……そうですね、お嬢様」

そして、そんな百代ちゃん達の隣で同じようにこちらを見つめている二人の女の子。彼女達こそ、俺と子ども達をこの場に招き……俺をアレと対峙させた張本人だ。

「……どうしてこうなった」

正面約三十メートル先に佇む巨大戦車　の姿が見間違いでない事を確認し、俺は改めてそう口にしたのだった。

・・・・・・
・・・

季節は既に夏真っ盛り。薄着でも少し動けば汗が滲んできそうなほどの晴天の下、俺は眼前にそびえ立つ巨大な建物を見上げていた。

「うわわ～！　おっき～！」

建物の大きさがあまりに衝撃的だったのか、小雪ちゃんが両手を広げながら叫ぶ。

「流石、九鬼が経営するホテル。見た目からすでにとんでもねえなぁ」

「ええ、英雄が自信を持って勧めてくれた所ですからね」

そんな小雪ちゃんに倣って視線を上げる冬馬君と準君。彼等の言う通り、この建物の正体は高級リゾートホテルで、俺達はここに宿泊する事となったのだ。

そもそものきっかけは、子ども達が夏休みにみんなでどこかにお出かけしたいと計画を練ったのが始まりだった。

海や温泉など色々案が出ていたみたいだが、冬馬君が友人にアドバイスを求めた結果、「なら全て叶えればよかろう！」と何とも豪快な答えを返してくれた上で、すぐ目の前に海水浴場を備えたこのホテルを紹介してくれたらしい。

当然、宿泊費等もとんでもないものになりそうだったが、どうやら冬馬君達から相談を受けた親御さん方がどうせなら家族サービスも含めて自分達も参加させて欲しいと

ポンと費用を出してくれた。しかも、子ども達の友達だからと百代ちゃんと一子ちゃん（百代ちゃんの妹さん）の分まで引き受けてもらっただけではなく、織江さんと俺の分まで用意してくれようとしたのだ。

以前織江さんに恩を感じていると聞いてたから彼女だけならまだわかる。けど何の関係も無い俺まで参加させてもらうのはいくらなんでも図々しすぎると断ろうとしたのだが、「いつも子どもが世話になってるから」「織江様の客人なら私達の客人だから」と言い切られてしまいこうして参加させていただく事となった。

織江さんは織江さんで自分の分は自分で出すと言ったら俺の時以上の剣幕で断られて困ったように笑っていた。

京ちゃんもお父さんを呼び寄せて一緒に来ている。今回の旅行を通じて関係修復が出来ればいいと密かに願っている。

ただ残念なのは、百代ちゃん達の所のおじいさんが来れなくなった事だ。なんでも数日間川神院に武術関係のお客さんが連日訪問してくる予定が入ってしまい総代であるおじいさんが対応しなくてはならなくなったらしい。

「いやじゃいやじゃ！　ワシも織江ちゃんとビーチでキャッキャウフフするんじゃ！」

そう叫びながらお弟子さん総出で引き止められるおじいさんを見て百代ちゃんはそれはもう満面の笑みで「ざまぁw」と言い放ったと後で一子ちゃんから聞いた。

にしても、日ごろ百代ちゃんから小言が多い云々愚痴を聞かされていたから、とても厳格な人でこういったイベントには参加しなさそうなイメージがあったけど、そんなわけでもなさそうだな。未だにご挨拶出来てないけど、やっぱりお孫さん達に関わってる以上一度顔を合わせに行った方がいいよな……。

「どうしたのお兄様？　もうみんな行っちゃったわよ？」

一子ちゃんの声に我に返る。少し前から百代ちゃんに連れられてお店にやって来るようになった彼女は百代ちゃんの義理の妹さんだ。とにかく元気な子で、それにとても努力家だと百代ちゃんは自慢するように教えてくれた。それだけで彼女達の仲の良好さが窺い知れた。

ただ、初対面時に「初めまして！　あなたがお姉様のお兄様ね！」と言われた時は面食らったが、どうやら百代ちゃんが俺の事を説明する時に〝兄のような人〟と言ったらしい。

「べ、別に……他に適する言葉が思いつかなかったから咄嗟に出ただけです……！」

だとしても関係無いね！　とばかりに俺は百代ちゃんの頭を撫でまくった。だってさ、嬉しいじゃん！　それだけ彼女に信頼してもらっているって証拠じゃん！　そんなん撫でるしかないじゃん！

……話がそれた。とにかく、そういうわけで一子ちゃんの俺の呼び名は〝お兄様〟と

なった。その時、なんか小雪ちゃんと京ちゃんが可愛らしく頬を膨らませてたのでつついてしまったが俺は悪くねえ！

「早く着替えてみんなで海に行きましょ、お兄様！」

「そうだね。じゃあ遅れないように俺達も行こうか」

一子ちゃんと手をつないでみんなの後を追いかける。この距離ではぐれる事はまずないが、大事なお孫さんをお預かりしている以上、ウザがられない程度にはしっかり面倒をみないといけないからな。

「……お兄様の手、温かい」

「ごめん、暑いだろうけどちょっとだけ我慢してね」

「う、ううん。そんな事ないわ。それにお姉様もよくこうやって手をつないでくれるから」

いいお姉さんじゃないか百代ちゃん（泣）。

そうやって二人そろってホテル内へ足を踏み入れる。中に入った途端涼しい空気に思わずため息が漏れた。

「大将～。こっちですよこっち」

受付前にいる準君達の元へ進む。……しっかし、改めて見渡すと中もとんでもないな。普通に木とか植えてあるし、噴水みたいなものもある。スタッフさんも超キビッキ

ビだし、きっとサービスも最上級なんだろうなぁ。
「ああ亮真さん。今チェックインが済んだところよ。はい、あなたのお部屋のカギ」
「ありがとうございます」
事前に予約（というか完全予約制ホテルらしい）していたおかげでスムーズにチェックイン出来たみたいだ。ちなみに部屋割りは葵家、井上家、榊原家、椎名家はもちろんそれぞれのご家族で一部屋。織江さん、百代ちゃん、一子ちゃんが一緒の部屋で、俺はなんと一人で一部屋与えてもらってしまった。しかも他のみんなと同じスイートルームを！
一般庶民としてはもう罪悪感というか申し訳なさしかなくてせめてグレード下げてくださいって言ったら、そもそもここはスイートルームしかないと返されてしまった俺の気持ちを誰か理解してください。
そうやって俺が心の中で嘆いている間に子ども達はすぐにでも海に行きたいと口を揃えて親御さん達に訴えている。とりあえず荷物を置きにいかないといけないからと十五分後にさっき見た噴水前に集合という形になった。
エレベーターに乗り込み目的の階を目指す。
「ところで、みんな同じ階なんですか？」
「ええ、そうよ」

「ちなみに何階なんですか？」
「ええっと、確か五十階だったかしら。そうよね葵さん？」
「はい、織江様」
　へえ、五十階かぁ……ファッ!?　ご、五十階!?　高いとは思ってたけどそんなにあるのこのホテル!?
「英雄から窓からの景色は中々のものだと聞いてますから、きっと神崎さんにも気に入っていただけると思いますよ」
「そ、そうか。それは楽しみだね……」
　ニコニコしながら教えてくれる冬馬君。なんか、さっきから驚いてばっかだな俺。それに比べて冬馬君や準君の落ち着きっぷりよ。親御さんの関係でパーティーとかよく出席してるって聞いてるし、こういうセレブ御用達な場所にも慣れてるんだろうな。
　そうこうしている間にエレベーターの電子板が五十階を表示したと同時にドアが開く。カギにくっついた部屋番のプレートの数字と同じ部屋を探して廊下を進む。
「私達の部屋はここだな！」
「ボク達はここ～」
「私達はここですね」
「んで、俺達がここ」

「私達はここ……」
見事にみんな隣同士だな。まあ、そのへんも配慮してくれたんだろう。早速カギを開け中に入る。
「これは……凄いな」
それしか言えんのかこのサルゥ！　と言われそうだが、俺の貧相な語彙力じゃ室内の豪奢さを表現できません。凄いベッド！　凄いテレビ！　凄い窓！　凄い景色！　終わり！　閉廷！　以上！
「……とりあえず着替えよう」
荷物から水着を取り出し着替える。用意したのは無地の黒いトランクスタイプ。これにパーカーを着て……と。
今回の旅行の主役は子ども達だからな。俺自身海に飛び込んでガチガチに泳ぎまくるわけでもないし、日焼け止め塗るのも面倒くさいからこれでいいや。
「まだ、時間はあるが……」
さっさと着替えたから集合時間までまだあるけど、やる事もないしもう行くか。カギはまたフロントに預ければいいんだろうか。とりあえず行ってみよう。
戸締りを済ませエレベーターへ。そしてフロントにカギを預けて数分後、百代ちゃん達もそれぞれに水着に着替えて姿を見せるのだった。

・・・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・

「百ちゃんアタック！」
「つぶねえっ！　ちょ、殺す気かパイセン!?」
「はっはっは。何を言っている準。私達はただビーチバレーをしているだけじゃないか」
「手加減しろって言ってんの！　耳元で「ヒュゴウ」って音がしたぞ！」
「いいからほら、そっちのボールだぞ」
「ええい、なんとか一泡吹かせてやるッ！」
「その意気ですよ準ン?ァッ!?」
「若ぁぁぁぁぁぁぁァ!?!?!」
「あ、しまった……」
「んしょ……んしょ……じゃじゃーん！　ピサの斜塔～」
「わあ、凄いわ小雪！　ねえ京、小雪が凄いものを……っ!?」
「ふう……どうかした？」
「ね、ねえ、何を作っているの？」

「兄様の像」
「お～。面白そう～！　ボクもやる～」
　おもいおもいにはしゃぎまわる子ども達の姿に思わず笑みがこぼれる。パラソルの下でジッとしているだけで汗が流れるほどの暑さだが、彼等には関係無さそうだ。
「亮真さん。はい、水分補給は忘れずにね」
「ありがとうございます」
　涼しげな意匠の浴衣に身を包んだ織江さんがお茶を手渡してくれた。すぐに飲まずにおでこに当てたりして涼をとる。
「ふふ、見て頂戴。あの子達の顔」
「そうですね。みんな本当に楽しそうでよかったです」
「……ありがとう、亮真さん」
「え？」
　唐突なお礼に思わず首を傾げると、織江さんは柔和な表情でただ静かに話をつづけた。
「あの子達がこうしてここで友達として一緒に笑っていられるのは、あなたのおかげよ」
「そんな事は無いと思いますが……」
「そうね。あなたがいなくても、いずれあの子達は出会っていたかもしれない。だけど、

その時、あの子達の関係が良好なものになっていたかどうかはわからない。人というのは、出会う時期で全く異なる関係になってしまうものだから」

まあ、確かに織江さんの言うように、タイミングや環境であっさり友達になれたり、逆にただのクラスメイトや顔見知り以上にはならないって事もある。

「あなたが百代さんと出会い、私のワガママを聞いてくれたから……小雪さんと出会い、彼女を助ける事が出来た。その小雪さんが冬馬さんや準さんと出会った事で京さんがお店にやって来た。そして、あなたがお兄さんとしてあの子達の信頼を得た事で、百代さんは一子さんを連れて来るようになった。もちろん、あの子達自身の相性も良かったのが幸いだったのもあるでしょうけれど。ただ、この日、この場所であの子達が一緒になって遊ぶ未来を導いたきっかけを作ったのは間違いなくあなたよ」

「そう……なんでしょうか。あまりそういった実感はありませんが……」

「百代さん達の笑顔……それが全てよ亮真さん」

「お～い！　何やってるんだ神崎さ～ん！」

再び子ども達に視線を向けようとした途端、百代ちゃんがビーチボール片手に俺を呼んだ。

「そんな所でジッとしてないでこっち来てくださいよ。手合わせは我慢してますけど、これなら存分に対決出来ますからね！」

「大将ぉ！　敵を……俺と若の敵を取ってくれぇ！」
「お兄さんもビーチバレーやるの？　じゃあボクも混ぜて～」
「あ、ちょっと小雪。京の手伝いは……って、あれ。京はどこに……」
「私は兄様と同じチームだから」
「いつの間に!?」
「ふ、ふふ……全員集合ですね」
「若!?　ああ、そんな生まれたての小鹿みたいにプルプルして……！」
「あらあら、ご指名みたいよ亮真さん」
……ああもう。最近ほんっとあの目（期待を込めたキラキラしたヤツ）に弱くなったなぁ俺。
「すみません、織江さん。ちょっと行ってきます」
「はい、行ってらっしゃい。せっかくの海なんですからあなたもしっかり楽しみなさいな」
パラソル下から抜け出し、みんなの元へ駆け寄る。それから、一度昼食休憩を取りつつ、子ども達は満足するまでめいっぱい遊び続けるのだった。
結果、夕食時には皆ヘトヘトとなっており、せっかくのバイキング式料理もちょっとしか手をつけずそろって寝床についてしまった。その後、子ども達を寝かしつけた親御

さん達は待ってましたとばかりに酒盛りを始め、俺もそれに付き合わされた。
一応身体上は未成年なので酒は飲まなかったが、代わりに俺自身の事について色々質問攻めされてしまった。織江さんとの関係とか。子ども達の事とか。あと、俺に特殊性癖があるかどうかとか。最後のヤツはまあ、年の離れた男が息子や娘に変な気持ちを抱いていないか確認したかったんだろう。冬馬君や準君の親御さんは冗談みたいに言ってたけど、京ちゃんのお父さんは割と目がマジだった気がする。
そして、宴もたけなわとなった所で俺も解放され、精神的な疲れもあってか俺もベッドに飛び込むと数秒も経たずに意識を手放したのだった。

・・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

……そうだ。一日目は本当に楽しく平和に終わったんだ。二日目の今日だって、みんなで観光とお土産を見て回ろうってホテルからタクシーを出してもらって出かけたんだっけ（織江さんはお留守番）。
子ども達がみんなでお揃いのものが欲しいって言うから、それならとお土産屋さんに入った。……そこで彼女達に出会ったんだ。
「あ……」

「ん……？」

一子ちゃんが可愛らしいハンカチに手を伸ばすと同時に、一人の女の子が同じ物に手を出す。触れ合った手にお互いも顔を合わせた。

「あ、ごめんなさい。お先にどうぞ」

「かたじけない」

金髪の女の子が嬉しそうにハンカチを手に取り、一子ちゃんも続く。

「うむ、この色……マルさんにピッタリだな」

「お友達にプレゼントするの？」

「ん？　ああ、私の姉のような人でな。お世話になっているお礼をしようと思って」

「それは素敵ね！　私もお姉様がいるからあなたの気持ちわかるわ！」

「おお、あなたもそうなのか！　私はクリスティアーネ・フリードリヒ。あなたの名前を伺ってもいいだろうか」

「私は川神　一子よ。……それにしてもクリスティアーネさん、外国の人なのに日本語上手ね」

「日本の時代劇が好きでな。言葉の意味をもっとよく理解したかったから勉強したんだ」

「努力したのね。私、一生懸命努力する人は尊敬するわ」

「そ、そうか。ありがとう一子殿」
「やだ、一子でいいわよ。殿なんてくすぐったいわ」
「ならば、私の事もクリスでいいぞ」
　……一子ちゃんコミュ力すげえ。あっという間に仲良くなってるし。
「どうした一子？」
「お嬢様、どうかされましたか？」
　仲良く会話する二人に気づいたのか、一子ちゃんの下に百代ちゃん。女の子の方に赤い髪に眼帯をした女の子が近づいてきた。見た感じ、百代ちゃんよりちょっとだけ年上かな。
「あ、お姉様。何でもないわ。この子……クリスとお話してただけだから」
「……そうなのですか、お嬢様」
「ああ、一子の言う通りだマルさん。偶然同じお土産に手を伸ばしてしまってな。彼女が先に譲ってくれたんだ」
　金髪の子が補足すると、赤髪の子の表情が僅かに和らぐ。
「なんだなんだ一子。こんな可愛らしい子と知り合うなんて流石我が妹。お姉様にも紹介したまえ」
「は、はい。えっと、この子の名前はクリスティアーネ・フリードリヒ。日本の時代劇が

好きで、日本語もそれで勉強したんですって。ここには姉の様に思っている人にお土産を買いに来たんですって」
「あ、こ、こら一子！　マルさんの前でバラしたら意味ないだろ！」
「え？　あ、ごめんなさい！　もしかしてそっちの人が……」
「そうだ。この人がマルさんだ。む～。後で驚かせようと思ってたのに」
「お、お嬢様。私の為に……!?」
うわぁ、すっごく嬉しそうだなあの子。尻尾あったらブンブンしてそう。
「まあいい。それで一子、今度は私にそちらの方を紹介してくれないか」
「もちろん。この人が私の大好きで尊敬している川神　百代お姉様よ！」
「ドーモ、クリスティアーネサン。川神　百代デス」
「川神　百代？　……まさか、あのＭＯＭＯＹＯですか？」
何かに気づいたかの様な言い方をする女の子に百代ちゃんが怪訝な顔を見せる。
「ん？　その言い方だと、私の事知ってるのか？」
「ええ。父から川神院。そしてあなたの事はよく聞いています」
驚くべき事に、ドイツからやって来たというこの二人はご家族が軍人らしい。そして、そんなご家族から、日本には川神院という武の総本山があり。その跡取りとなる川神　百代というとてつもない実力者がいるのだと聞いていると。

「いやあ、私も有名になったもんだなぁ」
「流石お姉様だわ！」
「うむ、百代殿の噂は私も知っている。マルさんなんかいつか出会うことが出来たらぜひとも手合わせしたいと言っていたしな」
「……へえ」
　百代ちゃんが目を細める。それに気づいていない一子ちゃんは金髪の子と話を続ける。
「じゃあ、クリスは休みを利用して旅行に来たの？」
「いや、休みではあるが、旅行というわけじゃないんだ」
「？」
「合同演習後の休暇という事でしょう」
　そこでタイミングを計ったかのように冬馬君達がやって来た。
「冬馬、どういう意味だ？」
「川神市がドイツのリューベック市と姉妹都市提携を結んでいる事はご存じでしょうが」
「そうなのか？」
「そうなの？」

「……それでですね、その関係で日本の自衛隊と合同演習を行う際、ドイツ軍は九鬼が所有する土地を借りて演習をするそうです。これは数年前からの恒例行事となっているようです。そして、演習終了後は一般人を招き入れていろんなイベントを行っているそうです」
「へえ、若。どこからそんな情報を？」
「出発前に、ホテルのロビーにいらっしゃったマダム達に伺いました」
「そうだったのね。あ、じゃあせっかくの休暇なのに長々とお話ししてたら勿体ないわね。ごめんなさいクリス」
「気にするな。こちらこそ引き止めるようなってしまって悪かった。じゃあ、マルさん。そろそろ行こうか」
「ええ。みんな、私達も……お姉様？」
　それじゃあねと別れようとする両者だったが、何故か百代ちゃんと赤髪の子が動かない。
「……そっちのマルさんはまだ私に用があるんじゃないのか？」
「……あなたにそう呼ぶの事は許可していない。私の名はマルギッテ・エーベルバッハ。呼びたければそちらで呼びなさい」
　あれ～、可笑しいぞ～（某名探偵感）。なんで剣呑な雰囲気になってるんですかねこの

二人。
「では、マルギッテ。さっきから私だけに殺気を送り続けていたのはどういう意図がある？」
「さっきから殺気……はっ、これは……！」
「はいはい、ちょっと静かにしとこうなユキ」
「先ほどそちらの彼が説明した通り、現在演習地では一般人向けのイベントが行われています。そして、その中で軍人の格闘術を披露する場も設けてあります」
「だから？」
「そこで私と戦いなさい、川神　百代」
　あ、わかった。この子あれだ。少し前の百代ちゃんみたいな子だわ。
「聞けば、あなたも強者との闘いを求めているとか。ならば、私と戦う事は必然と思いなさい」
「まるで自分が強者のような言い方だな」
「ええ。だから試してみてはどうです？」
「ふ、ふふふ……確かに面白そうだな」
「では……」
「だが断る」

「なっ……!?」

キッパリと拒否を示す百代ちゃんに、信じられないとばかりに目を見開く女の子だったが、すぐにそれが嘲りへと変わる。

「怖気づいたのですか？」

「いや……ジジイがな」

「ジジイ……？」

「川神　鉄心。ウチの総代。で、そのジジイから、この旅行中一度でも暴れたら二度とこいつ等と遊びに出させんって言われてなぁ。私としてはぜひとも戦いたいと思っているが……同じくらい、こいつ等とつるんでるのも楽しいんだ」

「百代ちゃん……」

「パイセン……」

感激した様子の小雪ちゃん達に、ちょっと気恥ずかしそうに頭を掻く百代ちゃん。

「だからまあ、悪いがアンタの思いには応えられない。どうしてもっていうなら直接川神院を訪ねてくれたらいい」

「……仕方ありませんね。総代の厳命を破らせたとなっては後で問題になる恐れがある。ここは引き下がるとしましょう」

どうやら一件落着みたいだな。

「すまないなみんな。マルさんは強い者を見ると戦いたい気持ちが抑えられないのだ。……そうだ！　お詫びといってはなんだが、もしよければイベント会場まで私達が案内してやろう」
「イベントって、さっき言ってたヤツか。どうする？」
「まずは父達に報告ですね。まあ、元々観光する目的でここに来たわけですし、行ってみるのも面白いかもしれませんよ」
「よし、じゃあ早速聞きに行こう」
　そんなわけで、話し合いの結果、次の目的地はイベント会場となった。再度タクシーを拾い。会場近くまで来たところで徒歩に切り替える。
「結構賑わってるみたいだな」
　準君の言うように、周囲では同じ方向に向かって進む人の波が出来ていた。これみんなイベント会場に向かっている人なのだろうか。
　そうして足を踏み入れた先は、見渡す限りの広大な土地に人が溢れかえっていた。出店はもちろん、軍のイベントという事からか戦闘機や戦車が展示されている。
「こういうのって機密情報とか大丈夫なのか？」
「その点に抜かりはありません」
　詳しくは言えないが、悪い事しようとする輩はすぐにわかる様になっているらしい。

「けどまあ、こういうのって俺らは楽しめそうだけど、女子からしたら退屈なんじゃねえの？」
「ですが、中々体験できる事でもありませんし、見てみれば意外と……おや、どうしました百代さん？」
「なあ、クリス。あの建物なんなんだ？」
　百代ちゃんの示した先には、長方形の真っ白い建物が建っていた。見たところあまり人が集まっていない様に見える。
「ああ、あそこは戦車の解体ショーをやってる」
「……は？　解体？　戦車を？」
「凄いんだぞ。工具じゃなく武器を持った軍人達があっという間に戦車を鉄くずに変えてしまうんだ。ただ、ドイツでは好評だけど、こちらではあまり人気が無いようなんだ」
「ああ、だからあそこだけ人がいないのですね」
「どうです、川神　百代。手合わせが無理ならばアレで勝負しますか？」
「どっちが先に戦車を破壊出来るかって？　うーん……お、そうだ！　そんなに勝負したいのなら神崎さんとやったらどうだ」
　……はい？
「神崎？」

「ほら、そこで呆気に取られてる人だよ」
「……何故、この方の名を？」
「それは――――」
「だって、お兄さん強いんだよ」
　こ、小雪ちゃん!?
「小雪の言う通り、その人強いぞ。何せ、私の攻撃を一度も食らった事の無い人だからな」
「お兄さんね、テロリストや悪魔と戦った事あるんだって」
　ええ!?　俺そんな事言って……ましたね。ええ、しっかりと。
「……それは本当ですか？」
「……嘘は言ってないよ」
「あなた職業は？　軍人なのですか？　それともボディーガード？　傭兵？」
「生憎、そんな仕事に就いた事は無いかな」
「ならば、何故あなたのような一般人がテロリストと戦う事になったのです。それに悪魔などと非科学的な……」
　はい。おっしゃる通りです。だけど、あの時はなんとか京ちゃんを説得しようと必死だったんですよ……。

「いいでしょう。では川神　百代の攻撃を捌き切ったというあなたの実力、拝見させてもらうとしましょう。ええ、まさか子ども相手に嘘を吐いて偽りの称賛を受けたかっただけではないでしょうから」

・・・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

そして話は冒頭に戻る。マルギッテちゃんが中にいたスタッフさんに話しかけ、何やら準備を始めた。なんか酷く驚かれてたけどなんて説明したんだろう。

いやまあ、一般人が見物じゃなく参加するとか言い出したらそりゃ驚くか。

「見物される方々はこちらへどうぞ」

俺以外の全員が見物スペースに移動したところで、前方の床がスライドし、何かがせり上がってくる。やがて姿を現したその正体は巨大な戦車だった。

もう一度言おう、どこからどう見てもガチガチの戦車だった！

「……本物？」

「ええ。現役を引退した旧式のものを訓練用にとっておいたものです。なので思い切りやってもらって構いません。武器が使いたければそちらを」

指定された立ち位置の横の床がスライドし、そこから武器の載せられた台が上がって

来た。
武器か、本当はあの剣が使えれば一番いいんだけど、ここで取り出したらまたえらい事になりそうだしな。
ただ、せっかく用意してもらったし、何か使うか。
といっても、この中で使えそうなものといったら。
「おお！　刀か！　マルさん、神崎殿が刀を選んだぞ！」
時代劇が好きだからだろうか、刀を手にした俺を見てクリスティアーネちゃんが興奮している。ちゃんと剣帯まで準備しているあたりやけにこだわりを感じる。
しかし、彼女には申し訳ないが、時代劇みたいな派手でカッコいい殺陣は俺には無理だわ。
俺に出来る事と言えば、あっちで刀剣使いの後輩にお願いして教えてもらった事だけだから。
彼曰く、俺の場合斬ればその時点で終わりだから、後の事は考えずに最初の一刀に全てをかけたらいいそうだ。懐かしいなぁ。あの時は事情があってとにかく吸収できるものは何でもやろうと思ってたから、当時、彼も色々あって疲れていたからかやけに青ざめていた表情をしていたのも覚えている。今にして思えば、酷い先輩だったな俺。
とにかく、俺に出来る事はただ一つ。何も考えずただ一刀に全てを注ぐだけだ。

「……よし、やるか」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

戦車対人間。言葉だけならば聞いた者が耳を疑いそうなその対決が百代達の目の前で始まろうとしていた。

「やれやれ、大将も災難だねぇ」

「お姉様、お兄様って強いの？」

「防御に関してはかなりのものだと思う。だが、何が得意でどんな攻撃をするのかは私も見たことがない」

「では、これが神崎さんの実力の初披露というわけですね。ふふ、あの人の初めてに立ち会えて私は嬉しいです」

「ドキドキするね京……そのカメラどうしたの？」

「ふふふ、兄様の雄姿をバッチリ収めてみせる」

鼻息荒くする京の後ろで、娘の姿を記録しようと用意したはずのカメラをかっぱらわれた父が泣きそうな顔をしていた。

「準備が出来たらいつでも始めてもらって構いません」

マルギッテの指示に亮真は静かに眼前の戦車を見据える。

「……やるか」

そう呟いたと思った刹那、この場にいる武術に身を置く全ての人間が亮真から発せられる気配が豹変したのに気づく。普段の彼を知っている者ほどその変わり具合に対する衝撃は大きかった。

（何て目だ……。それに、これだけの距離があるのに届く威圧感……。あれが、武人としての神崎さんの姿……！）

「？　どうしたんだよパイセン？」

「……お前ら、これから起きる事をよく見ておけよ」

かつてないほどの真剣な声色の百代にただ事ではない何かを感じた準や冬馬は言われるままに亮真へ視線を固定する。

誰もが固唾を飲んで見守る中、亮真は静かに鞘に入れたままの刀を構え、体勢を低くする。その姿にクリスはまたもや興奮した。

「おお……。あれこそジャパニーズ居合……！」

「……美しい」

瞬間、自らの発した言葉に動揺するマルギッテ。しかし、否定しようにも武人としての己が認めてしまう。あれは格好だけ取り繕おうとしただけでは決して身につくものではない。かといって、この国の教育機関等で学ぶという武道とよばれる理念からのも

のでもない。あれは……明確に敵と戦うための技だとマルギッテは理解した。知らずの内に、彼女の目に熱がこもる。

周囲の期待値がエライ事になっている事などつゆ知らず、亮真は目をつむる。そして、一瞬の後に見開いたかと思ったその直後、彼の姿がその場から掻き消えた。

「え、消え――――」

キイイイイイイイイインッ!!!

誰かが発そうとしたその言葉を、甲高く澄んだ音が覆いつくす。人によっては耳を塞いでしまいたくなるようなその音の発生源はどこかと人々が視線を動かそうとしたその時……戦車が割れた。

文字通り中央から真っ二つ。現役だったころは砲弾や地雷も耐えられるという売り出し文句だったはずのその頑強な装甲が、まるでバターの様に切り裂かれ、内部が露わとなっていた。そして、その戦車の後方に亮真は立っていた。

その光景に頭が追い付いていないのか。誰も言葉を発しない。その間にも、亮真は刀をその場に下すと両断した戦車の片側に一足で踏み込むと、両手を上下に合わせたそれを迷う事無く突き出した。

「白虎咬っ！」

練り上げられたエネルギーが青白い光となって戦車を飲みこむ。炸裂した光の暴力

の前に、戦車はなすすべもなくその姿を消滅させた。文字通り、跡形もなく。まるで最初から存在していなかったかのように。

「……こんなもので満足してもらえたかな？」

無言の空間の中、いつものお兄さんに戻った亮真の声に、ようやく人々は動き始めたのだった。

ＩＮ　ＳＩＤＥ

ふう、上手くいってよかった。これで、嘘つき呼ばわりは勘弁してもらえたらいいんだけど。

刀を拾い上げ、最初の場所へ向かう。剣帯と一緒に元に戻した。

「あの……」

うわ、びっくりした！

いつの間にかマルギッテちゃんが背後に立っていた。え、何。またなんか言われそうで怖いんだけど。

「あなたの実力を侮った事、謝罪します」

「あ、ああ。それは別に気にしていないよ」

「その上でお願いします。ぜひ、私と手合わせ願いたい」

あ、やっぱりそういう流れ？　うーん、百代ちゃんに夢中だとばかり思っていたけど、今のでずいぶん評価してもらえたみたいだな。だけど……。
「……ごめんね。それだけは勘弁してもらえるかな？」
ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「……とんでもねえな、ウチの大将」
最初に言葉を発したのは準だった。しかし、未だに目の前で起きた事が信じられないのか体が小刻みに震えている。
「……流石の私も今の衝撃を言葉にする事は難しいです」
「え、人間だよね？　神崎星から来た神崎星人じゃないよね？」
「ほえ～～～～」
「ユキはまだ戻って来ていませんね」
「だな。……で、こっちも」
「……」カシャカシャカシャ！
「し、しっかりして京！　な、何で気絶してるのにシャッターの指は動いてるのよ!?」
「ありゃホラーだわ。……で、パイセンはどうだったんだ？」
「……」

「パイセン？」
「ん？　あ、ああ。そうだな。流石に私も驚いた」
どこか歯切れの悪そうな百代だったが、準はそれに気づかなかった。
（……そうだ。本当に凄かった。私は、こんな実力者に勝負できるまで待ってろなんて言ったのか……）
しかも、褒めてもらうためという極めて自分勝手な理由で。
いつもの百代ならば、むしろこんな強い人間といつか戦えるのだとただワクワクしただけだろう。しかし、何故か亮真相手だとそんな気分になれなかった。
（もしかしたら、神崎さんはもう忘れているかもしれない。私との約束を）
本人が聞いたら「ファッ!?」となりそうだが、百代の気分はますます沈む。
これまで、手合わせを挑んできた者達は百代が勝つとそれから二度と挑んでこなくなった。別にそれはいい。自分の実力をわきまえる事は大切な事だから。
けれど、川神院の中で、同じ実力の門下生達が互いの長所や欠点を指摘しあいながら切磋琢磨する姿を見て何故自分にはあんな相手がいないのかと思った事もある。
そんな日々の中で出会ったのが亮真だった。言いがかりをつけた自分を怒る事もなく、それどころか鍛錬に付き合ってくれた。たった数日だけだったが、百代は今も鮮明に覚えている。

祖父や師範代達と行う鍛錬とはまた違う時間を過ごす事で百代の意識は少しずつ変わり始めた。川神院での修行を真面目に行わずに亮真に会いに来ている自分が酷く情けない様に感じるほどに。

だからこそ、百代は彼と約束したのだ。いつか、本気で戦ってもらえるよう、自分も適当な真似はせず一心に鍛え続けるのだと。孫の意識の変化に鉄心は驚きつつも喜んだという。

しかしここに来て、亮真の実力の一端を垣間見た百代の中に小さな陰が生まれた。自分は約束の為に変わった。けれど、彼にとって自分との約束はそこまで重要なものではないのではないだろうか。あれだけの実力者だ。きっと多くの武人から勝負を挑まれるだろう。そうなれば、子どもである自分との約束などその内忘れてしまうのではないだろうか。

（……いや、それでいいのかもしれないな）

約束なんか忘れて、ただのお兄さんとしてこれからも遊び相手になってもらう方が、きっと自分は……。

「ありゃ、何する気だあの人？」

それ以上考えたらダメだと頭を振った百代の耳に準の声が届く。目を遣ると、亮真の前にマルギッテが立っていた。何やら会話を交えていたと思ったら最後にこう言った。

「その上でお願いします。ぜひ、私と手合わせ願いたい」
　勝負の誘いをかけるマルギッテに準は目を丸くする。
「アレを見て挑むつもりかよ……」
「むしろ見てしまったからでしょう。先ほどから飛び出したくてたまらないって様子でしたし」
「うわあ、どっちが勝ちそうかしらお姉様？」
「……さあな」
　そう、自分には関係ない。亮真が誰と戦おうが……。そのはずなのに、なんだか胸がモヤモヤする。
「悪い、私ちょっと外に……」
「……ごめんね。それだけは勘弁してもらえるかな？」
　背中を向けようとした百代の動きが止まる。
「何故です。まさか、私が子どもだと侮っているのですか？　私があなたを侮っていた意趣返しだと？」
「いや、それだけは無いとハッキリ断言しておくよ」
「では何故？」
「ある子と約束してるんだ。いつか手合わせするって」

「ッ……！」

目を見開く百代。愕然とする彼女に気づかず亮真は続ける。

「今すぐじゃないけど、俺に勝つために修行するからその時まで待っててくれって。そして、その時が来たら褒めてくれって。……そこまで言われたらさ、俺も彼女との約束に真摯でいたいなって思ったんだ。だから、俺はその子と手合わせする時が来るまで、他の誰ともしないって決めてるんだ」

彼は忘れてなかった。それどころか何よりもそれを大切にしてくれていた。百代は何故か泣きそうになった。

「いま大将が言った子って」

「百代ちゃんの事だよね」

「お、気が付きましたかユキ」

「もう大丈夫。えへへ、良かったね百代ちゃん。お兄さん、ちゃんとあの時の約束覚えてくれてるみたいだね」

「……ふ、ふん！　当然だ！　この百代ちゃんとの約束を忘れるなんてありえないもんな！」

努めて明るい声をあげる百代。その本心に気づいていたのは果たして……。

「だからゴメンね。もう一度言うけど、決してマルギッテちゃんを侮っているわけじゃ

ないんだ」
「ちゃっ!?　ん、んんっ！　……その約束した彼女とは川神　百代の事ですか」
「わかるか？」
「その様な事をいうのは彼女くらいでしょう。……わかりました。約束や契約の重要性は私も理解しています。非常に不本意ではありますが、そこまで聞かされてなお願い出るのは無粋が過ぎるでしょう」
「ありがとう、マルギッテちゃん」
「そ、そのマルギッテちゃんというのは止めなさい！　そ、それよりあなた！　私とも約束しなさい！　川神　百代と手合わせしたら次は私とすると！」
「それは……けど、キミはドイツへ帰るんだろう？」
「いずれまた日本に来る日は必ずやって来ます。その時に約束を果たしてもらえればいい。逃げる事は許しません。そうなったら必ずあなたを探し出して戦ってもらいます」
「……わかった。約束するよ」
「それでいいのです。……で、では握手を。こ、これは約束の証であり、先ほどあなたが見せてくれたものへの敬意を示したいだけであって他意はないのだと理解しなさい！」
「？　とにかく、握手すればいいのかな？」
そう言って亮真が手を差し出そうとした瞬間だった。横から伸びた小さな手がそれ

を止める。
「はい、そこまで～」
「なっ!?」
「困るな～マルギッテさん。私達の神崎さんに色目を使ってもらっちゃ～」
「どうする兄様？　射す？　射す？」
　握手を阻んだのは百代。そして亮真の隣に立つ京は台の上に置いてあった弓矢をマルギッテに向けながら亮真に確認する。
「ま、そういうわけだから。アンタは二番の女として私が神崎さんと手合わせする時まで精々我慢しておく事だ」
「に、二番!?　川神　百代！　と、取り消しなさい今の言葉！　その言い方は誤解を……！」
「取り消せだと？　断じて取り消すつもりはない」
　逃げ出す百代とそれを追いかけるマルギッテ。
「……うん！　マルさんが楽しそうで何よりだ！」
　それを見て、どこかズレた発言をするクリスであった。